仙台市文化財調査報告書第141集

南小泉遺跡

第19次発掘調査報告書

１９９０年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第141集

南小泉遺跡

第19次発掘調査報告書

１９９０年３月

仙台市教育委員会

序　　文

南小泉遺跡は、昭和初期に霞ノ目飛行場の拡張工事の際に発見されて以来、弥生・古墳時代の遺跡として、注目を集めるところとなりました。

しかし、田園地帯の中にあった南小泉遺跡も、現在では住宅に囲まれ急激に市街化が進行してきております。それに伴い仙台市でも昭和53年頃から発掘調査を実施し、本調査で第19次を数えるまでになりました。

この間の調査成果により、本遺跡は弥生・古墳時代だけでなく、古くは縄文時代から、新しくは平安時代・中世、さらには若林城に関連する近世の遺構群をも包括する複合遺跡であることが判明してきております。

こうした、地域の歴史の解明に発掘調査の関わりは大きなものがあります。しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであり、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の危機にさらされているわけであります。したがいまして、教育委員会としては、開発関係機関等と絶えず協議をとおして、この様な貴重な文化財を保存し後世に伝えるべく努力しているところであります。

本書は、宅地開発事業でやむをえず破壊されてしまう文化財の発掘調査成果を収録したものであります。これらの成果が、地域の歴史的解明と文化財保護思想高揚の一助となれば幸いです。

最後に本調査にご協力頂きました関係各位に感謝申し上げる次第です。

平成２年３月

仙台市教育委員会

教育長　**東海林恒英**

例　　言

1．本報告書は平成元年度に調査した、株式会社サンホームズによる宅地造成に伴う発掘調査の成果を収録したものである。

2．本報告書を作成するにあたり、遺物、図面などの整理、執筆、編集は佐藤淳が行った。

3．調査、整理に関する記録、及び出土遺物は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．周辺の遺跡図は、国土地理院作成の１：25,000「仙台東北部、東南部」を使用した。

2．土層註記などに記載している土色は、「新版標準土色帖」（小山．竹原：1976）を使用した。

3．調査においてのグリット軸は任意方向のものであるが、全体図中には平面直角座標第Ｘ系による国土座標も同時に記している。

4．遺構図の表示

・遺構名については以下のような遺構略号を使用し、各々の検出順に番号を付していった。

SK－土壙跡　SE－井戸跡　SD－溝跡　SX－性格不明遺構

SB－掘立柱建物跡　ピット（P）－小穴或いは柱穴

・遺構内の傾斜面は「TT」で表現し、攪乱などについては「ヲ」で表現した。

・層位名は基本層位をローマ数字、遺構内堆積土については算用数字で表し、その中でも細分されるものには、アルファベットの小文字や、「′」を枝番として付している。

・遺構図は1/20、遺物出土状況図は1/10で作成したものを、1/2、1/3、1/4の縮尺で収録している。

・掘立柱建物跡については、内業において全てのピットの平面、断面、間隔などを検討した上で認定している。

5．遺物図の表示

・遺物図は原寸で図面作成したものを、2/3、1/2、1/3の縮尺で収録している。

・土師器の黒色処理は網点のスクリントーンで表している。

・土器実測図は破片実測から図上復元したものが多く、なるべく残存範囲を記すようにした。

6．本文中の遺物にかかわる数字は遺物登録NOを表している。

7．石器、石製品の材質の鑑定は東北大学教養部教授蟹澤聰史氏にお願いした。また木製品の樹種同定は木工舎「ゆい」にお願いした。

本文・写真目次

序　文
例言・凡例
本文・写真目次
調査要項
Ⅰ．調査に至る経緯…… 1
Ⅱ．遺跡の概要…… 1
Ⅲ．調査の概要…… 3
(1)　調査方法…… 3
(2)　基本層位…… 5
Ⅳ．検出遺構と出土遺物…… 8
(1)　土壙跡とその出土遺物…… 8
(2)　井戸跡とその出土遺物……11
(3)　溝跡とその出土遺物……14
(4)　性格不明遺構とその出土遺物……18
(5)　掘立柱建物跡……22
(6)　ピットとその出土遺物……22
(7)　遺構以外からの出土遺物……26
1．Ⅰ層出土の遺物……26
2．Ⅱ層出土の遺物……29
3．Ⅲ層出土の遺物……29
Ⅴ．出土遺物とその年代……32
(1)　縄文時代の遺物……32
(2)　古墳時代の遺物……33
(3)　中世の遺物……35
(4)　近世の遺物……36
(5)　その他の遺物……37
Ⅵ．遺構の年代……38
Ⅶ．まとめ……40

写真図版……41

調　査　要　項

遺跡名称　南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号　C-102）

調査名称　南小泉遺跡第19次発掘調査(株式会社サンホームズによる宅地造成に関わる調査)

調 査 地　仙台市若林区遠見塚一丁目204-1.2，205，206-1.2.3，207-5

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査第二係

担当職員　佐藤　淳

調査期間

発掘調査　平成元年11月13日～12月12日

室内整理　平成２年１月５日～３月23日

調査面積　約 300 m²

調査参加者

発掘調査　芦野徳松・芦野ヒデ子・太田君子・佐藤愛子・佐藤とき子・佐藤久栄
佐藤よし子・田中スエ・千葉信子・鳥畑きみえ・針生いなよ・藤原美記子
峯岸安好・吉田アキヨ

室内整理　浅見禮子・植野幸子・小山つるよ・佐藤愛子・佐藤とき子・佐藤久栄
杉船比佐子・鈴木幸子・関谷栄子・高橋とみ子・三浦芳子・山田貞子

調査協力　株式会社サンホームズ・株式会社奥村組

Ⅰ．調査に至る経緯

平成元年３月２日付けで、㈱サンホームズによる宅地造成に伴う南小泉遺跡内での発掘届が出され、その内容は、約2,200㎡の敷地に数軒の宅地を造成するというものであった。この地域は、ここ数年来、宅地や道路建設件数が多く、これと同時に、仙台市教育委員会による開発地内での記録保存を前提とした発掘調査も数を増し、ほぼ毎年行われている状況にある。仙台市教育委員会文化財課では、㈱サンホームズと工事施工者である㈱奥村組と遺跡保存の協議を重ね、宅地部分に関しては現耕作土の上に更に盛土することにより、遺構面への影響は無くすことができたが、敷地の中央の道路部分については、地下に各種埋設管を設置するものであり、掘削せざるを得ない状況のものであった。調査に至るまでの下草刈り、表土掘削については、文化財課職員立ち会いのもと、原因者側があらかじめ行い、調査は11月13日から遺構の検出作業を行うという手順で進めていく事となった。調査期間は約６週間の予定であった。

Ⅱ．遺跡の概要

南小泉遺跡は仙台市街地の南東端に位置し、広瀬川北岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は遠見塚古墳を中心とした若林区南小泉、古城、遠見塚地区を中心に認識されているが、これまでの調査結果を踏まえると、おそらくはより広範囲に及ぶものとみられる。

この遺跡から出土する土器が東北の土師器研究の上で重要なものとなったことからもわかるように、当初この遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての集落跡との認識がなされており、古墳時代中期をはじめ検出された遺構は多い。ここ十数年来の調査において、平安時代の住居跡や中・近世の掘立柱建物跡などが多数検出され、第16次調査においては周囲に土塁や堀を巡らした中世の城館跡などが発見された。江戸時代初期に遺跡の西側に若林城が造営されるに伴い、この付近にも城を中心とした町割りに従い、城下町の建設が行われたと考えられる。当遺跡の調査ではこの時期とみられる建物跡や井戸跡の検出の他、陶磁器や木器などの生活用具の出土も増加しており、中世も含めて、今日まであまり注目されることのなかった中・近世段階での遺跡の姿が復元されようとしている。また近年では縄文土器や石器が少量ではあるが出土しており、今後遺構が検出される可能性も十分に考えられる。

このように、南小泉遺跡は自然堤防という地形上の利点を生かし、生産活動の場でもある沖積地にも囲まれ、古くは縄文時代の昔より現代に至るまで、連綿とした人間の営みの跡がみられる複合遺跡としての性格を有するものとして認識され、今後の調査にも期待がもたれる遺跡といえる。

No	遺跡名	種別	立地	年代	No	遺跡名	種別	立地	年代
1	南小泉遺跡	集落跡	沖積地	縄文～近世	16	沖野城跡	城館	自然堤防	中世
2	南目城跡	城館	沖積地	中世	17	砂押Ⅰ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
3	陸奥国分寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	18	神柵遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
4	陸奥国分尼寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	19	砂押Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
5	志波遺跡	集落跡	沖積地	奈良・平安	20	中柵西遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
6	明屋敷遺跡	集落跡	沖積地	平安	21	河原越遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
7	北屋敷遺跡	集落跡	沖積地	平安・中世・江戸末期・明治初期	22	今泉遺跡	城館	自然堤防	縄文～近世
8	押口遺跡	集落跡	沖積地	奈良～平安	23	愛宕山横穴群	古墳	丘陵	古墳・奈良
9	中在家遺跡	集落跡	沖積地	平安	24	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
10	長喜城館跡	城館	沖積地	中世	25	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵	南北朝～室町
11	仙台東郊条里跡	条里遺構	沖積地	奈良・平安	26	富沢遺跡	集落跡	沖積地	旧石器～近世
12	法領塚古墳	古墳	沖積地	古墳	27	泉崎浦遺跡	集落跡	沖積地	縄文・古墳・平安・近世
13	養種園遺跡	集落跡	沖積地	平安	28	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳
14	若林城跡	城館	沖積地	戦国～江戸	29	郡山遺跡	官衙	自然堤防	古墳・奈良
15	遠見塚古墳	古墳	沖積地	古墳	30	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

III．調査の概要

(1) 調査方法

調査は道路部分のみとする為に、調査区は東西方向36 mで幅6 m部分を主とし、それに取り付く南北14 m、幅4 mの北側張出し部からなる。調査区面積は拡張部分を含めて約300 m²である。重機による表土掘削作業後、実測図を作成する為の基準として任意のグリット軸を設け、基準杭を設置した。基準杭は基本的には調査区形状に合わせ5 m間隔としたが、北側張出し部分及び、西端部については調査区内に収める為にその限りではない。これを基に調査区グリットの座標原点(X＝0, Y＝0)を調査区外の北西地点に仮定し、南北軸をX軸、東西軸をY軸とし、X、Y数値とも南及び東方向に行くに従い数値が増すようにした。グリットの名称は北西隅の5 m間隔の基準杭の名称で読み変えている。さらに検出遺構の方向の特定が容易で、将来的に調査地点の位置が復元可能なように、調査区内の2つの杭に平面直角座標系第X系による国土座標数値を与えた。座標数値は都市計画道路、川内・南小泉線上に設けられた仙台市道路部設置の基準点から移設したもので、2点の座標数値は以下の通りである。

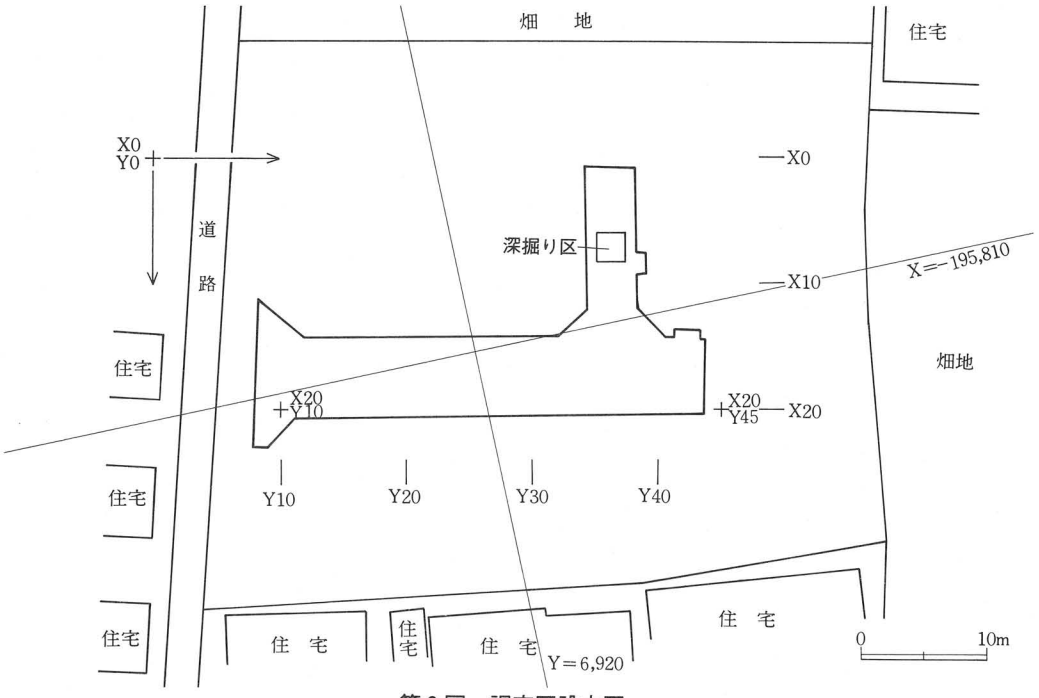
(X20, Y10) —— X＝－195,811.276、 Y＝＋6,903.932

(X20, Y45) —— X＝－195,818.498、 Y＝＋6,938.180

調査区の任意の座標軸は国土座標軸に対して東に約11°54′偏していることになる。

調査区の現況は畑地と更地であったが、畑地部分の盛土が30 cmなのに対して、西半部分の盛土は80 cmを越える箇所もあった為、表土層は重機により除去した。III層とした遺構検出面である黄褐色系の砂質シルト面の上面で精査を行うと、畑作時の天地返しによる攪乱が溝状に多数走り、攪乱を受けていない箇所に比べて30 cmもIII層が削られている状況で、遺構の遺存状態はそう良くないことが予想された。調査の記録としては各遺構、ピットを検出、掘り込んだ後、断面図、平面図を1/20スケール、遺物の出土状況については1/10スケールで記録し、写真による記録は35 mmカメラを使用した。またこの調査では、従来地山面と称されていたIII層中より遺物の出土が認められたことから、調査の終了段階に遺物の取り上げを主として、調査区の西側約1/3程のIII層を全体的に20 cm程掘り下げている。またIII層面より下層の状況を確認する意味で、北側張出し区において、III層面からの深掘り区を250 cm四方で設定し掘り込んだ。基本層の記録は調査区全体の堆積土の状況を把握できる南壁について行い、またIII a～c層のみられる西壁についても行った。調査区全体図は調査中作成した各遺構の平面図に、ピット位置図や壁ライン、座標ラインを加えて後日合成している。

第２図　調査区位置図



第３図　調査区設定図

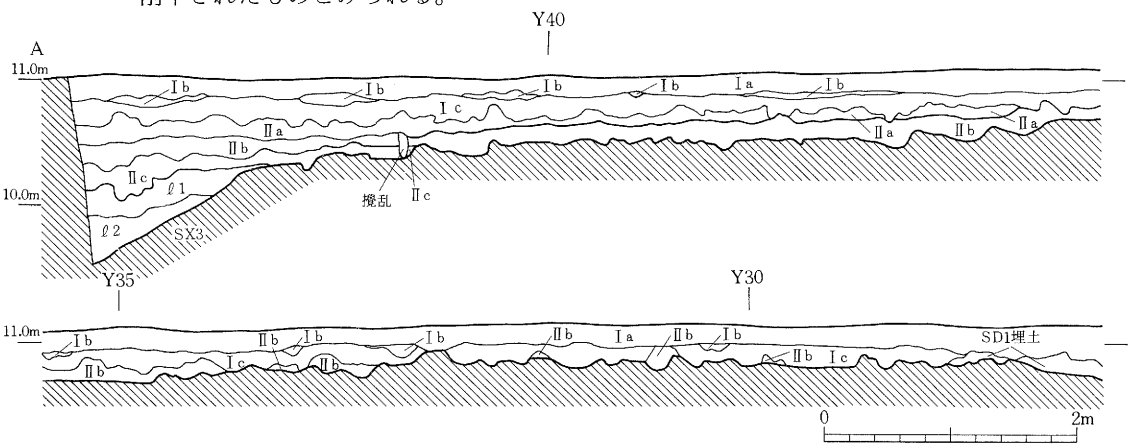
(2) 基本層位

調査では主として黄褐色土上面における遺構の検出を目的としていたが、今回は遺物の包含が確認された黄褐色土層をも掘り込んでいる。基本層は大別して3層に分層され、遺物の包含は全層に及んだが、人為的掘削を受け、遺構として認められたものは、全てIII層上面による検出であった。

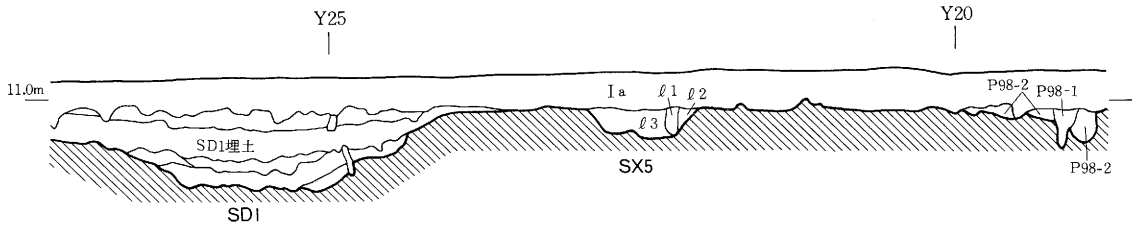
I　層　Ⅰa～cの3層に分層された。これらは全て表土層ととらえられ、つい最近まで畑地であったところの耕作土である。Ⅰa層はほぼ全域に見られ、層厚は10～30 cmを測る。Ⅰb層は層厚10 cm内のものであるが、III層とみられる明黄褐色ブロックを多く含む。西半では一定した層状をみせるのに対して、東半では断片的にみられるにすぎない。Ⅰc層はIII c層を深く攪乱しており、一部において溝状に平行して幾条も延びる事から、畑作時の天地返しによるものとみられる。

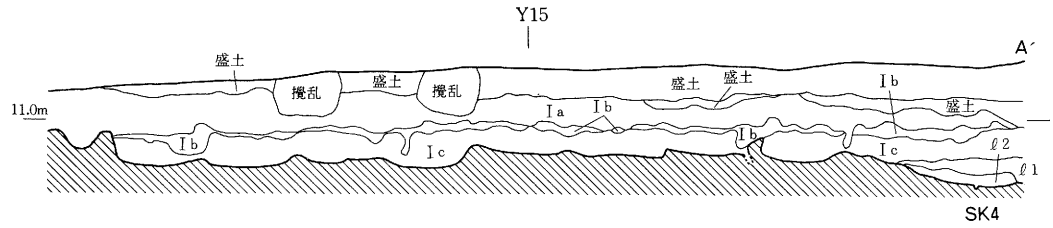
II　層　IIa～cの3層に分層された。調査区南東コーナー部分にIII層上面において明瞭なプランの違いとして、約20 m²の範囲で認められた。層の大部分はII a、b層によって占められるが、全体的に褐色の砂質土の中に、III層を巻き上げたとみられる小ブロックを含んでいる。層厚は25～30 cmで一定している。II b、c層とその層理面はかなり波打っており、かつての耕作土の可能性も考えられる。

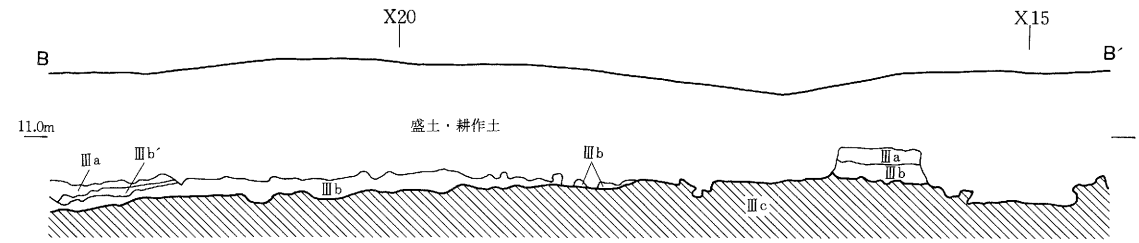
III　層　III a～cの4層に分層された。各遺構はIII層上面で検出されている。III層のなかでも僅かな違いではあるが、III b、III b′層がやや暗い黄褐色として認められ、遺物の包含はこの層を中心としている。I層による攪乱の為、III a層は極狭い範囲で、層厚も12 cm程が認められるに過ぎない。III b層は西壁部分に約7 m幅で認められたが、東方へ延びている状況ではなく、層厚は15 cm程のものである。調査区東半分についてもIII層の断面確認を行ったが、III c層より上層は確認出来ず、おそらくは後世の耕作により削平されたものとみられる。

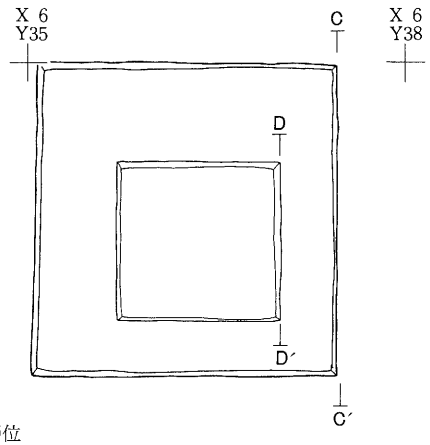


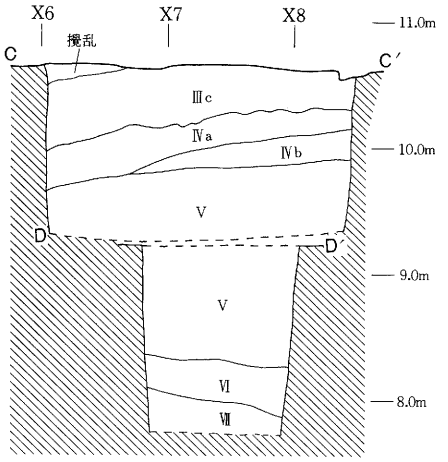
第4図　基本層位断面図　南壁（1）

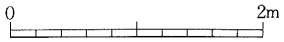












基本層位

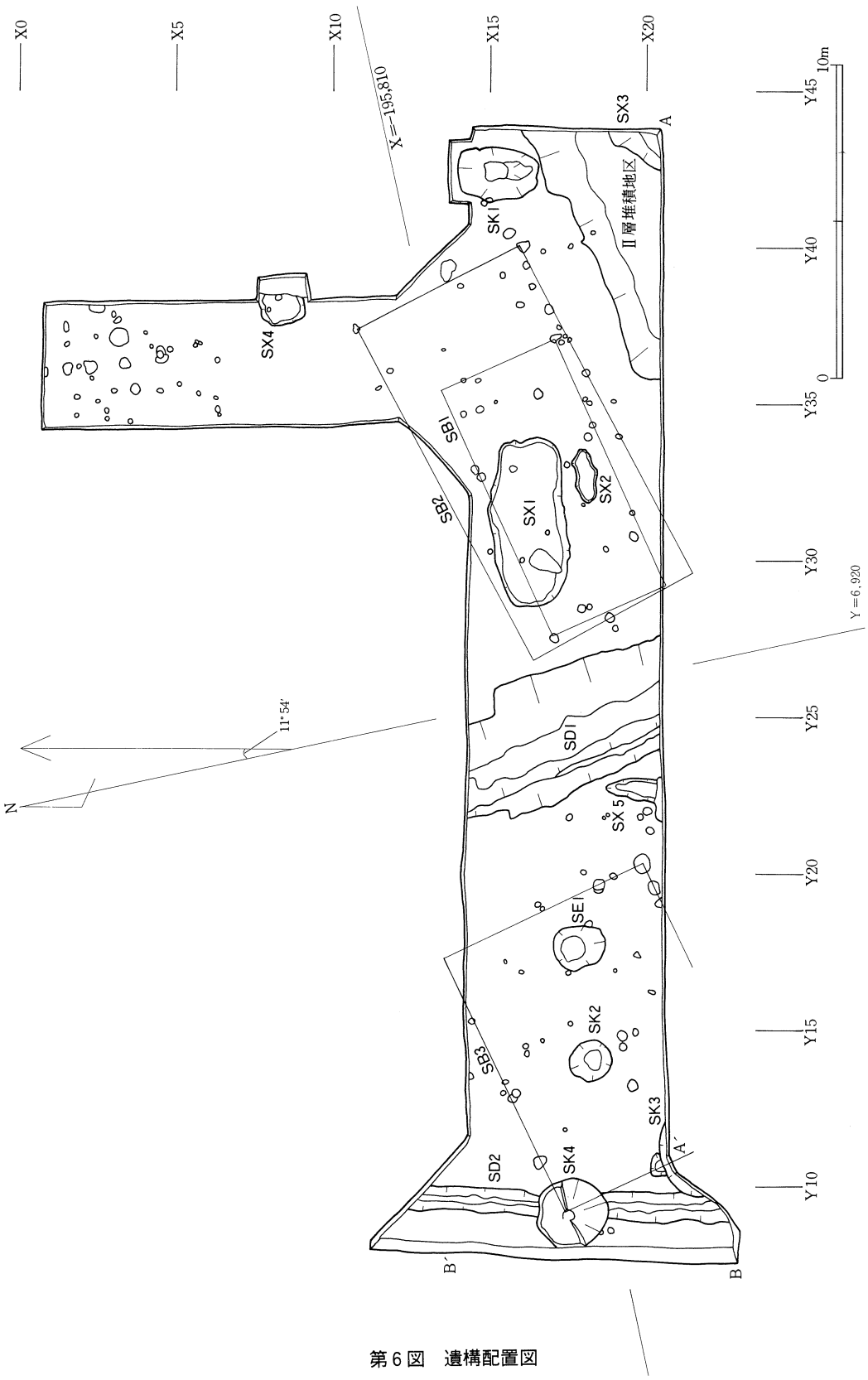
層No	土　色	土　質	備　考
1a	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質土	
1b	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	10YR6/6 明黄褐色、砂質シルトをブロック状に含む
1c	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	炭化物・焼土粒を全体に含む
2a	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒をまばらに含む
2b	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒をまばらに含む
2c	10YR4/4　褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒をまばらに含む
3a	10YR5/6　黄褐色	シルト	マンガン斑を全体に含む
3b´	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物を密に層状に含む
3b	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	炭化物を全体にまばらに含む
3c	10YR5/6　黄褐色	シルト	L3a に比して砂っぽい

ＬⅠａからＬⅠｃは現耕作土。
ＬⅡｂ、ＬⅡｃ共Ⅲ層と接する部分についてはⅢ層を小ブロックとして、かなり巻き上げている。

深掘り区基本層位

層No	土　色	土　質	備　考
3c	10YR5/6　黄褐色	シルト	灰白色シルトブロックが集中して見られる
4a	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	黄褐色砂質シルト層との互層
4b	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	L4a に比して明るく砂のみの均質土
5	10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR5/6 黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色が主となる	砂質土	砂質土のみの水性堆積 （層厚 1～2 mm から 20 mm 程）
6	5YR3/6　明赤褐色	砂質土	他に10YR7/3 にぶい黄橙色が見られる
7	10GY4/1　暗緑灰色	粘性シルト	粘性強、グライ化

第５図　基本層位断面図　南壁（２）、西壁、深掘り区


X0
X5
X10
X15
X20
X=−195,810
SX3
A
SK1
Ⅱ層堆積地区
SX4
SB1
SB2
SX1
SX2
Y45
Y40
Y35
Y30
Y25
Y20
Y15
Y10
10m
0
Y=6,920
11°54′
N
SD1
SX5
SE1
SK2
SB3
SK3
SK4
SD2
A′
B′
B

第6図　遺構配置図

IV. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構としては、土壙跡4基、井戸跡1基、溝跡2条、性格不明遺構5基、掘立柱建物跡3棟の他、137のピットがある。遺構の分布は調査区ほぼ全体にみられ、特に集中する箇所もなく、遺構間の重複もあまり認められなかった。

(1) 土壙跡とその出土遺物

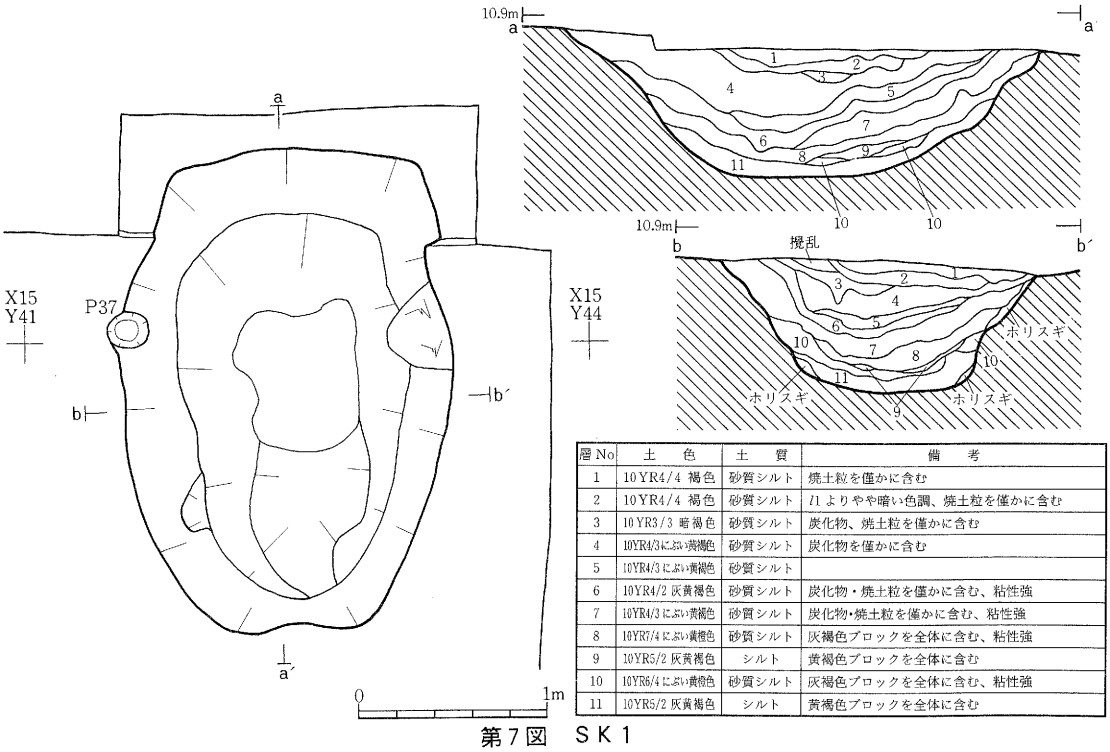
SK1 土壙跡

[位置] 調査区の東端、X15. Y42付近に位置する。長軸方向は真北に対して東に約12°偏している。

[遺構の確認] III層上面において検出した。SK1はP37を切っている。プランが調査区の北壁よりさらに北へ延びていたことから調査区を拡張して全体を確認した。

[形態・規模] 平面形は上端において北壁側にやや張りのある楕円形を呈し、下端もほぼこれに準じている。長軸は260 cm、短軸は180 cm、深さは土壙中央で75 cmを測る。底面は狭いが僅かな平坦面を持ち、明瞭な境のないまま壁面へと連続していく。壁面はほぼ四方とも45°程の傾斜をもって立ち上がり、中位の稜線より上半はやや緩やかとなり、特に東壁については僅かな段が見られる。

[堆積土] 11層に分層され、各層とも層厚は薄い。1～3層は褐色の砂質シルトを中心としているが、それより下層はIII層を小ブロックとして含むなど、黄橙、黄褐色を呈したシルト質土を

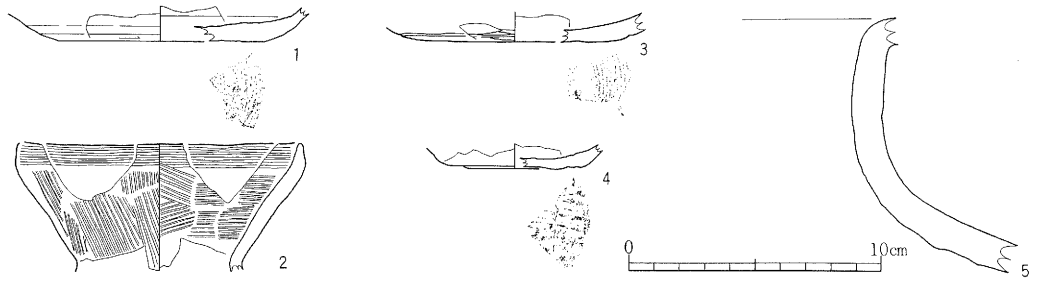


層No	土色	土質	備考
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	焼土粒を僅かに含む
2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	1よりやや暗い色調、焼土粒を僅かに含む
3	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物、焼土粒を僅かに含む
4	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を僅かに含む
5	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
6	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒を僅かに含む、粘性強
7	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒を僅かに含む、粘性強
8	10YR7/4にぶい黄橙色	砂質シルト	灰褐色ブロックを全体に含む、粘性強
9	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色ブロックを全体に含む
10	10YR6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	灰褐色ブロックを全体に含む、粘性強
11	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色ブロックを全体に含む

第7図 SK1

主体としている。全層を通して焼土粒、炭化物粒を少量含んでいる。各層の堆積状況から自然堆積とみられる。

[出土遺物] 堆積土中より非ロクロの土師器、須恵器、土師質土器、陶器が出土した。13～14cの常滑の甕より、土壙はこの時期に近いものと考えられる。



図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
8-1	1	須恵器	坏	SK1	3層	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	－	(80)	－		11-1
8-2	5	土師器	小型壺	SK1	埋土	口縁部：ヨコナデ、頸部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ、頸部：ハケメ	(72)	－	－		9-1
8-3	2	土師質土器	皿	SK1	4層	ロクロナデ→ナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	(90)	－	14c中頃～後半	11-6
8-4	4	土師質土器	皿	SK1	埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り、底部圧痕	ロクロナデ	－	(56)	－	14c中頃～後半	11-5
8-5	3	陶器	甕	SK1	10層	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	常滑、13～14c	12-1

第8図　ＳＫ１出土遺物

SK2　土壙跡

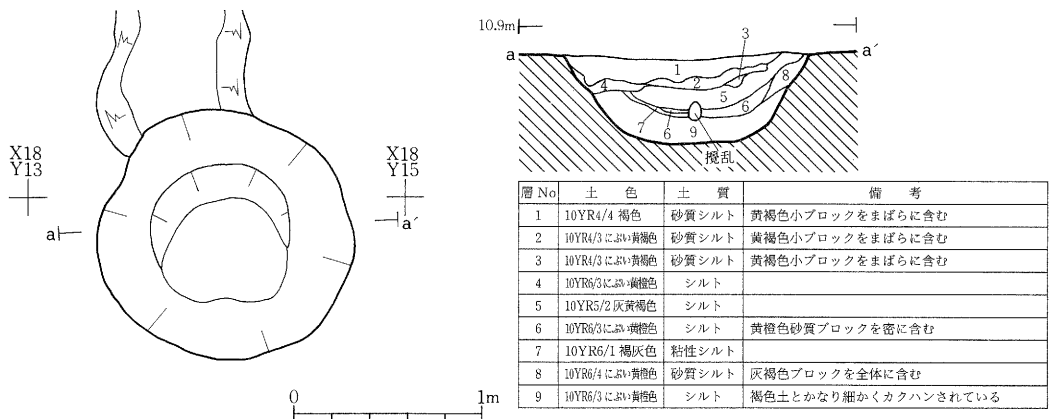
[位置] X18. Y14 付近に位置する。

[遺構の確認] III層上面において検出した。

[形態・規模] 平面形は上端、下端ともほぼ円形に近い形を呈している。径は 130 cm、深さは土壙中央で 44 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁面との区別は明瞭である。壁面は全周して45°程度の傾きで立ち上がり、北壁を中心に多少の稜線がみられる。

[堆積土] 9層に分層される。全体的に上半の層は砂質シルトを主体とするが、中程より下半についてはより粘性を帯びた土質となる。1～8層が自然堆積と判断されるのに対して、最下層の9層はその攪拌状況から、人為的に埋められた可能性がある。

[出土遺物] ほぼ中位の堆積土中より非ロクロの土師器、陶器、磁器が出土した。磁器には白磁



層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックをまばらに含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックをまばらに含む
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックをまばらに含む
4	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
6	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	黄橙色砂質ブロックを密に含む
7	10YR6/1 褐灰色	粘性シルト	
8	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	灰褐色ブロックを全体に含む
9	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	褐色土とかなり細かくカクハンされている

第9図　ＳＫ２

と染付があり、いづれも17c のものとみられることから、土壙はこの頃の時期に近いものと考えられる。

図版 No	登録 No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
10-1	8	磁器(染付)	碗	SK2	5層			(110)	−	−	17c?	12-5
10-2	7	磁器(白磁)	碗	SK2	5層			−	(34)	−	高台に砂粒、17c	12-6

第10図　ＳＫ２出土遺物

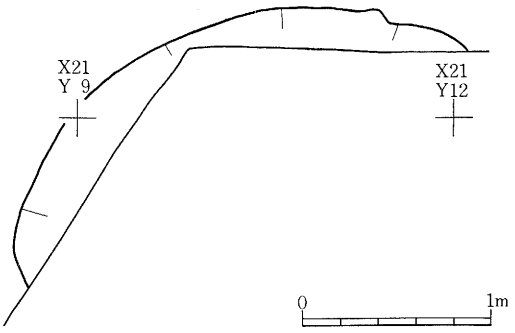
SK3　土壙跡

[位置] 調査区の西端、X20. Y11 付近に位置する。

[遺構の確認] III層上面において検出した。調査区南壁にかかるように土壙の 1 / 3 程の輪郭を検出したが、この地点は盛土が厚い為に調査区拡張は行わず、検出部分のみの掘り込みにとどめた。SK3 は P133 (SB3) を切っていることから SB3 よりは新しい時期のものであるが、出土遺物が無く、詳細は不明である。

[形態・規模] 平面形は円形或いは楕円形を呈するものと推定される。上端部分での径は 280 cm 以上と推定されるが、下端部分が未検出の為に、深さ、底面の状況については不明である。壁面は緩やかに立ち上がるものとおもわれる。

[堆積土] 掘り込んだ箇所において 2 層に分層された。共に黄褐色系の砂質シルトで、灰白色ブロック及び酸化鉄斑を全体に含んでいる。



層 No	土　色	土　質	備　考
1	10YR6/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑・灰白色小ブロックを含む
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑・灰白色小ブロックを含む

第11図　ＳＫ３

SK4　土壙跡

[位置] 調査区の西端、X18. Y9 付近に位置する。

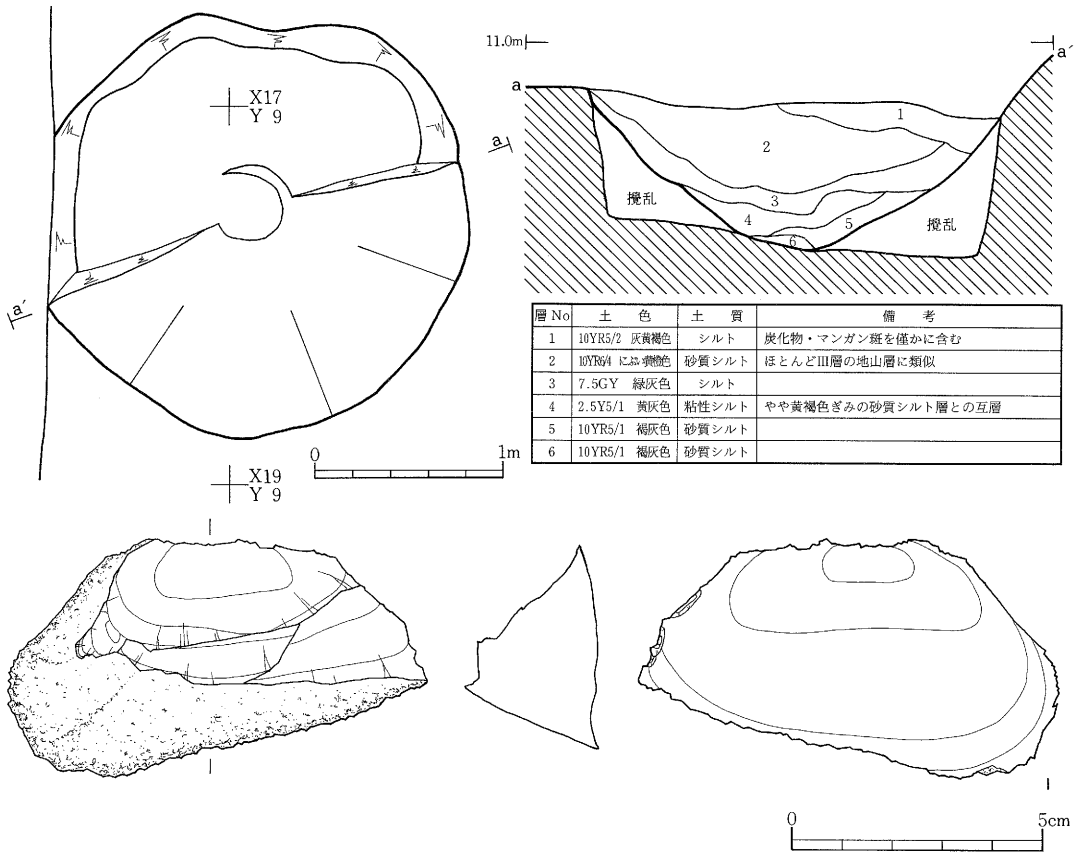
[遺構の確認] III層上面において検出した。調査区西壁に一部かかる形で検出したが、盛土の厚い箇所な為に調査区の拡張は行わなかった。土壙の北半に人為的攪乱があった為に、北半については上端プランを除いては本来の姿をとどめてはいない。SK4 は SD2 を切っている。

[形態・規模] 平面形はほぼ円形を呈し、径は 220～240 cm、 深さは土壙中央で約 80 cm を測る。土壙は全体にすり鉢状を呈し、底面は狭く、中央に僅かな平坦面をもち、壁面は全体を通して30～40°の傾きで立ち上がる。

[堆積土] 6 層に分層される。全体を通してやや砂質のシルトを主とした自然堆積土と考えられ

るが、4層については粘性が強く、黄褐色土層との互層となっており、土壙機能時には常に水の影響を受けるような状況にあったことが推察される。

［出土遺物］堆積土中より石核、縄文土器、非ロクロの土師器、須恵器が出土したが、石核、縄文土器については、この付近に縄文土器を包含するIII b層が存在することから、後に流入したものと考えられる。



層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	炭化物・マンガン斑を僅かに含む
2	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	ほとんどIII層の地山層に類似
3	7.5GY 緑灰色	シルト	
4	2.5Y5/1 黄灰色	粘性シルト	やや黄褐色ぎみの砂質シルト層との互層
5	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	
6	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	

図版No	登録No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ（mm）	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
12-1	9	剥片	SK4	3層	85×48×27.8	81.4	流紋岩			8-14

第12図　ＳＫ４

(2)　井戸跡とその出土遺物

SE1　井戸跡

［位置］X18. Y18付近に位置する。

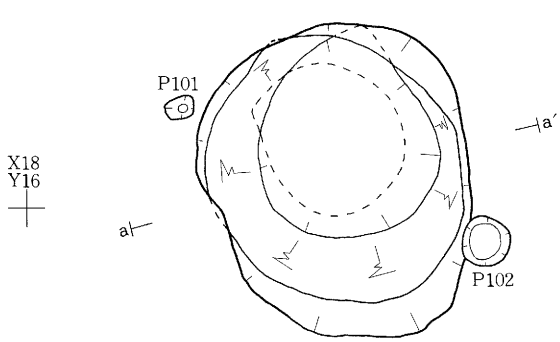
［遺構の確認］III層上面において検出した。SE1はP102を切っている。

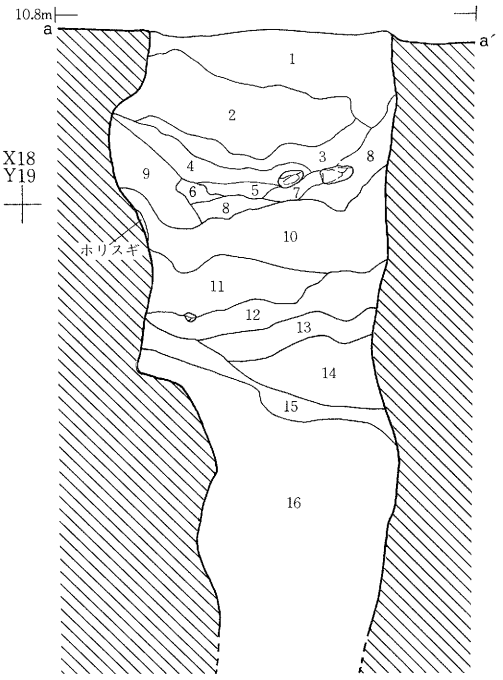
［形態・規模］検出面での平面形はやや南北方向に長い円形で、底面近くではほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。上端での長軸は170 cm、短軸140 cm程のものであるが、それより約3.2

m 下方においては径が 80 cm 弱と狭まっていく。壁面は東壁部分についてはほぼ直立気味に立ち上がるものであるが、他の箇所は壁面の剝落が著しく、上半分に限ってみれば本来の形をとどめてはいない。しかし深さ 2 m より下方については地盤の硬いこともあって、掘り込み当時の姿を残しているものとみられる。調査の安全管理上、掘り込みは検出面より約 3.4 m の深さで中断し、井戸底面の検出は行っていない。

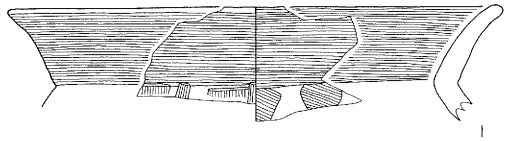
[堆積土] 深さが約 2.2 m までは15層の分層が可能であったが、それより下層については井戸内が狭隘で、且つ断面よりの湧水の多いことなどにより分層できず、一括して16層としている。全層とも基本的には自然堆積とみられ、水性堆積の為に細層が互層となる層や、明らかに壁面の崩落層と認められるものも多くみられた。

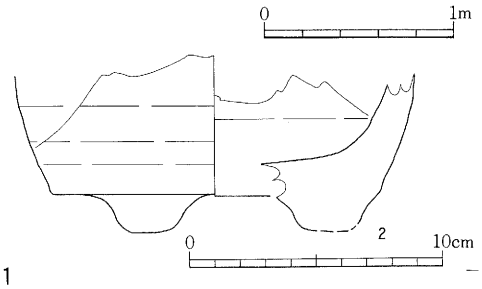
[出土遺物] 堆積土中より遺物の出土があった。11層より非ロクロの土師器、陶器、板状の木製品、16層より漆器、杭が出土し、他にも石器、土師質土器、瓦質土器、磁器、瓦などが出土しているが、井戸の性格上、堆積土中のみの資料により年代を知ることは難しい。



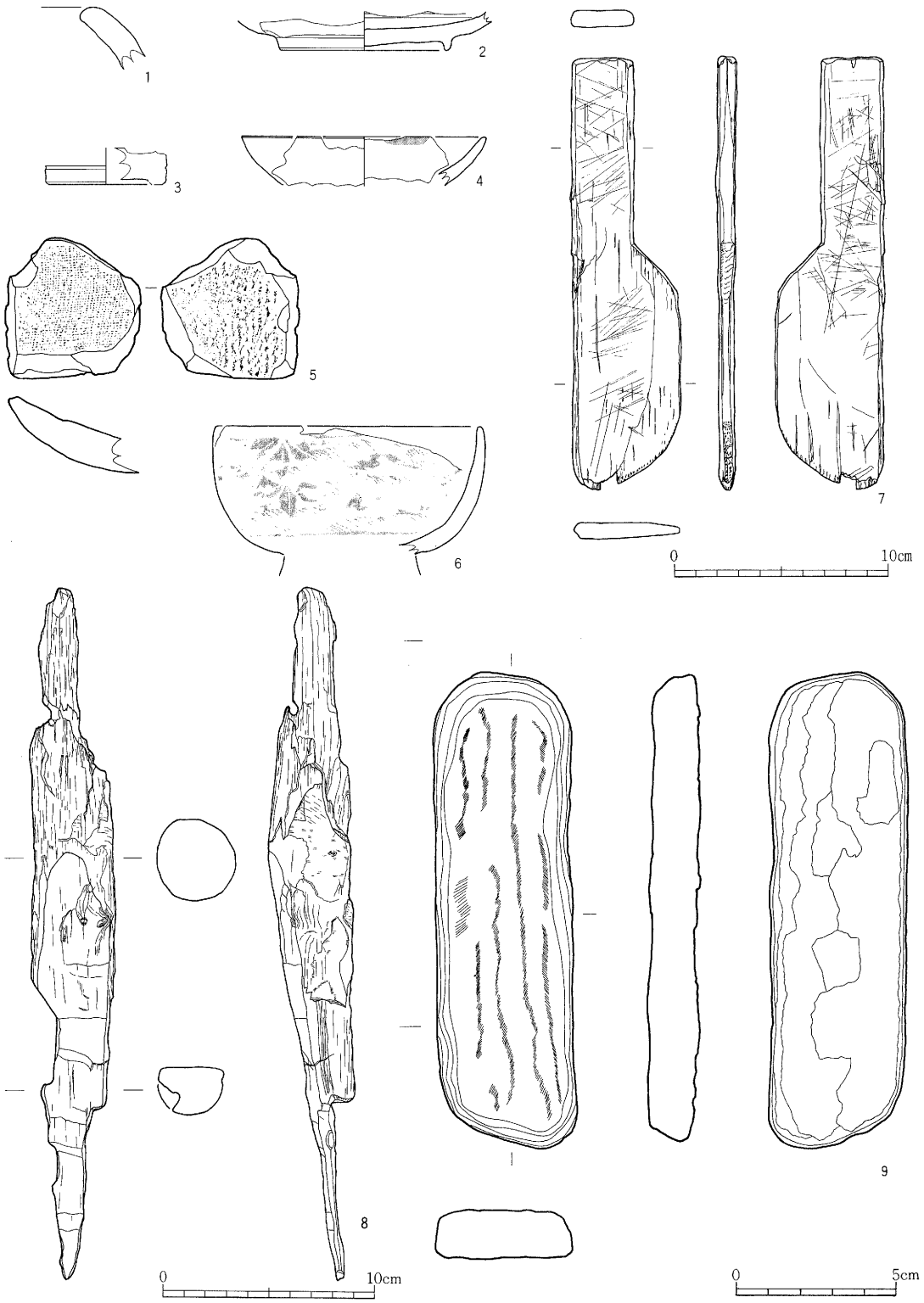


層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを全体に含む、炭化物をまばらに含む
2	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	5 cm 程の黄褐色ブロックをまばらに含む
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
4	10YR6/4にぶい黄橙色	シルト	10YR4/4 褐色、砂質シルトとの互層
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
6	10YR6/4にぶい黄橙色	シルト	10YR4/4 褐色、砂質シルトとの互層
7	10YR4/3にぶい黄褐色	粘性シルト	黄褐色ブロックを多量に含む
8	10YR6/4にぶい黄橙色	砂質シルト	完全な壁崩落層
9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質土	完全な壁崩落層
10	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	下半に黄褐色小ブロックを多量に含む
11	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質土	壁崩落層、黒褐色ブロックを少量含む
12	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色・黒褐色小ブロックを全体に含む
13	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色ブロックを全体に含む
14	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	黄橙色ブロックを少量含む
15	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	灰褐色ブロックを多量に含む
16	10YR4/1 褐灰色	粘性シルト	褐色の砂層が層状に見られる





第13図　ＳＥ１



第14図　ＳＥ１出土遺物

図版 No	登録 No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
13-1	43	土師器	甕	SE1	11層	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	(197)	－	－		9-2
13-2	41	瓦質土器	鉢	SE1	3層	ロクロナデ、底部：ナデ	ロクロナデ	－	(130)	－	手あぶり	11-18
14-1	38	土師質土器	鉢	SE1	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	近世	11-7
14-2	39	陶器	皿	SE1	1層	底部：回転ヘラケズリ、淡黄色釉		－	77	－	美濃、17c 前葉	12-2
14-3	40	磁器（青磁）	碗	SE1	2層			－	(56)	－	宋代	12-7
14-4	47	土師質土器	皿	SE1	埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	(114)			口縁の一部にスス付着、江戸初期	11-8
14-5	48	瓦	平瓦	SE1	埋土	凸面：縄目	凹面：布目	－	－	－		12-9
14-6	46	漆器	椀	SE1	16層	葉文、圏線		(124)	－	－		12-15
14-7	51	板状木製品	杓子？	SE1	16層	刃物による切傷痕		長さ (202)	幅 ×(150)	厚さ ×(8)	板目材、モミ属まな板にも使用？	12-16
14-8	52	杭		SE1	16層	加工面数：1面		残存長 (328)	幅 ×(39)	太さ ×(38)	丸材、樹皮付	12-17

図版 No	登録 No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ（mm）	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
14-9	45	石製品	SE1	11層	148×42×15.5	187.7	粘板岩	磨？：側面		8-13

(3) 溝跡とその出土遺物

SD1　溝跡

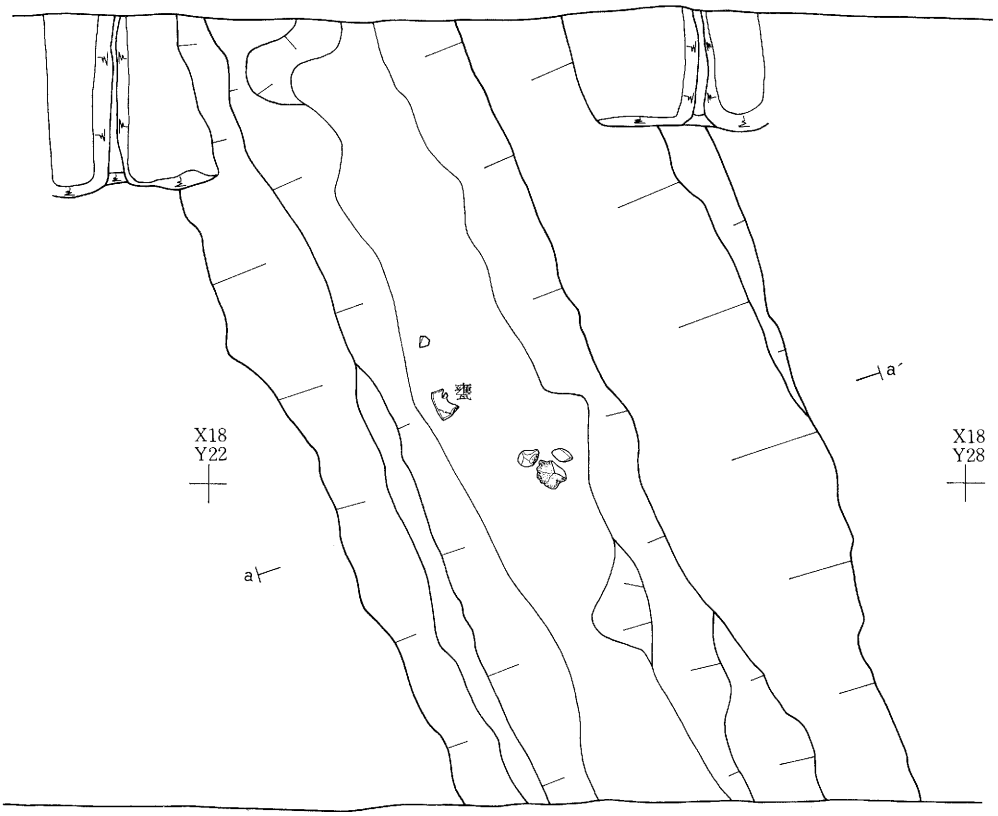
［位置］調査区のほぼ中央、Y21～28 ライン内に位置する。溝方向は真北に対して西へ約11°偏している。

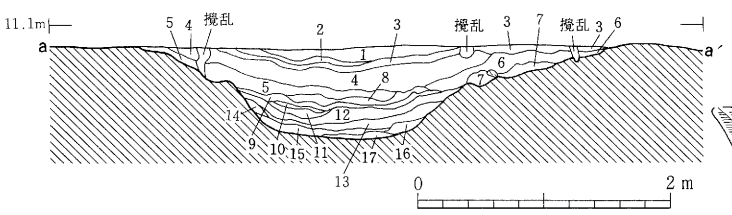
［遺構の確認］III層上面において検出した。北端は天地返しの為に上方がやや削平されているが、それ以外の遺存状況は良好である。溝の周囲には多数のピットが見られるが、溝の堆積土上には全く検出されなかった。

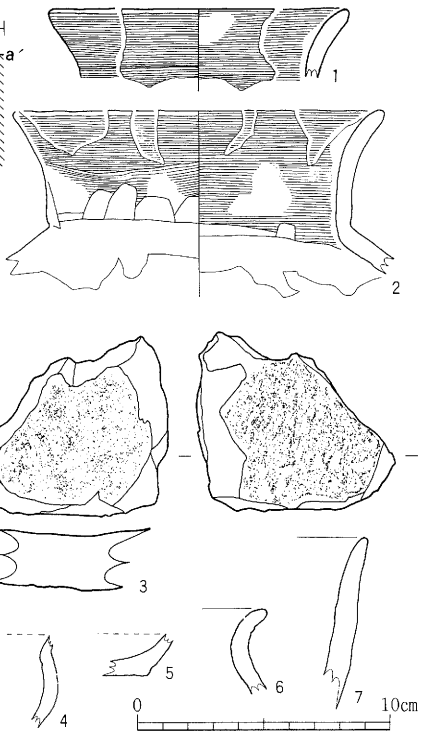
［形態・規模］調査区幅が約 6 m という制限はあるが、溝幅は南壁付近で 3.4 m、 中央で 3.8 m、北壁付近で 4 m と北に向かうに従い幅広となる。検出面からの深さは中央付近で 70 cm とそう深いものではなく、この数値は全体を通してほぼ一定している。底面幅も 80～100 cm で一定しており、わりと平坦な面をみせている。壁面は底面との明瞭な境をもつ。西壁は中位にある段までは45°程の傾斜をみせるが、それより上はより緩やかなものとなる。東壁は段こそないが中位に稜線をもち、立ち上がりの傾向は西壁同様である。溝全体としての形態は溝幅のわりには壁面の傾斜が緩やかで、深さもそう無いものといえよう。底面のレベル差は全体で 15 cm 内に収まるもので、また体感的にも傾斜の方向は判断できず、溝方向は特定しかねる。

［堆積土］中央に設定したベルトにおいて17層に分層されたが、同時に確認した南壁においては 6 層にとどまり、その対応関係も不明瞭であった。全体的に灰黄褐色が主体を占め、上半においては砂質が強く、下半はやや粘性を帯びてくる。15層は完全な砂層で、ほぼ底面全体にみられる。堆積土は全て自然流入とみられる。底面には酸化鉄の集積が著しく、北壁での断割りの結果、鉄分の集積は地山中 10 cm まで波状にみられた。

［出土遺物］堆積土中より非ロクロの土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、石製模造品、石器、瓦などが出土したが、量では非ロクロの土師器が最も多かった。しかし底面直上で中世陶器が出土したことから、SD1 はほぼこの時期に機能し始めたものと考えられ、周囲の遺物の散布状況をみると、土師器をはじめ他の遺物については後世の自然流入と考えられる。

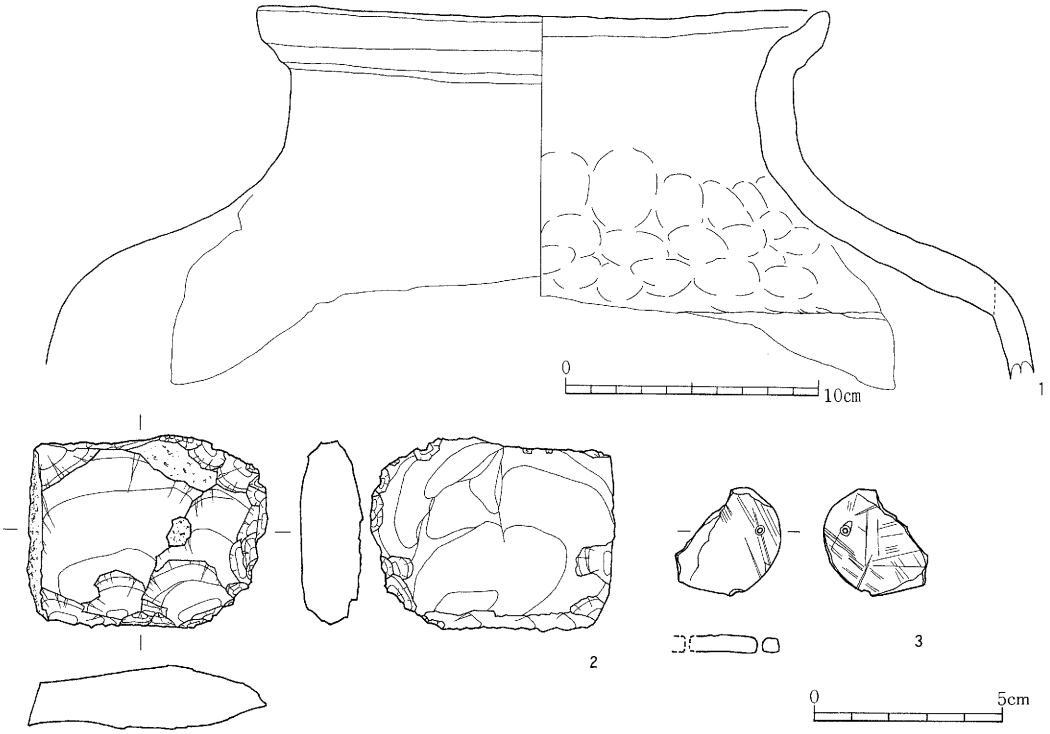






層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	酸化鉄・マンガンを多量含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	酸化鉄・マンガンを多量含む
3	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	酸化鉄・マンガンを多量含む
4	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	酸化鉄・マンガンを多量含む
5	10YR5/2 灰黄褐色	―	酸化鉄・マンガンを少量、黄褐色ブロックを含む
6	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	酸化鉄・マンガンを多量、砂質ブロックを含む
7	10YR5/2 灰黄褐色	―	酸化鉄・マンガンを多量含む
8	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質土	褐灰色砂質シルトブロックを多量含む
9	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
10	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・マンガンを多量含む
11	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物・焼土粒を僅かに含む
12	10YR5/2 灰黄褐色	―	酸化鉄・マンガンを多量含む、砂とシルトの互層
13	10YR4/2 灰黄褐色	粘性シルト	東壁近くで砂が多量混入
14	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・マンガンを多量含む
15	10YR5/2 灰黄褐色	砂質土	黄褐色ブロックを少量含む
16	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・マンガンを多量含む
17	2.5Y7/3 浅黄色	砂質シルト	酸化鉄をまばらに含む
全体を通して、炭化物を僅かに含む			

第15図　ＳＤ１



図版 No	登録 No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
15-1	21	土師器	甕	SD1	埋土	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	(116)	—	—		9-3
15-2	15	土師器	甕	SD1	埋土	口縁部：ヨコナデ 後、一部ナデ、体部：一部ナデ	口縁部：ヨコナデ後、一部ナデ、体部：一部ナデ	(144)	—	—		9-5
15-3	14	瓦	平瓦	SD1	1層	凸面：縄目	凹面：布目	—	—	—		12-10
15-4	12	土師器	坏	SD1	1層	ナデ	ナデ	—	—	—		—
15-5	18	赤焼土器	坏	SD1	埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	10c	11-15
15-6	16	土師器	甕	SD1	埋土	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	—	—	—		9-4
15-7	17	土師器	甕	SD1	埋土	ハケメ	ヘラナデ	—	—	—		—
16-1	24	陶器	甕	SD1	底面	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ、頸部下半に指圧痕	(226)	—	—	白石窯系	12-3

図版 No	登録 No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ（mm）	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
16-2	13	ピエス・エスキーユ	SD1	1層	53×49×13.4	28.8	珪質頁岩			8-15
16-3	23	有孔円板模造品	SD1	埋土	径29以上×4.5	4.6	粘板岩		貫通孔1か所	12-11

第16図　ＳＤ１出土遺物

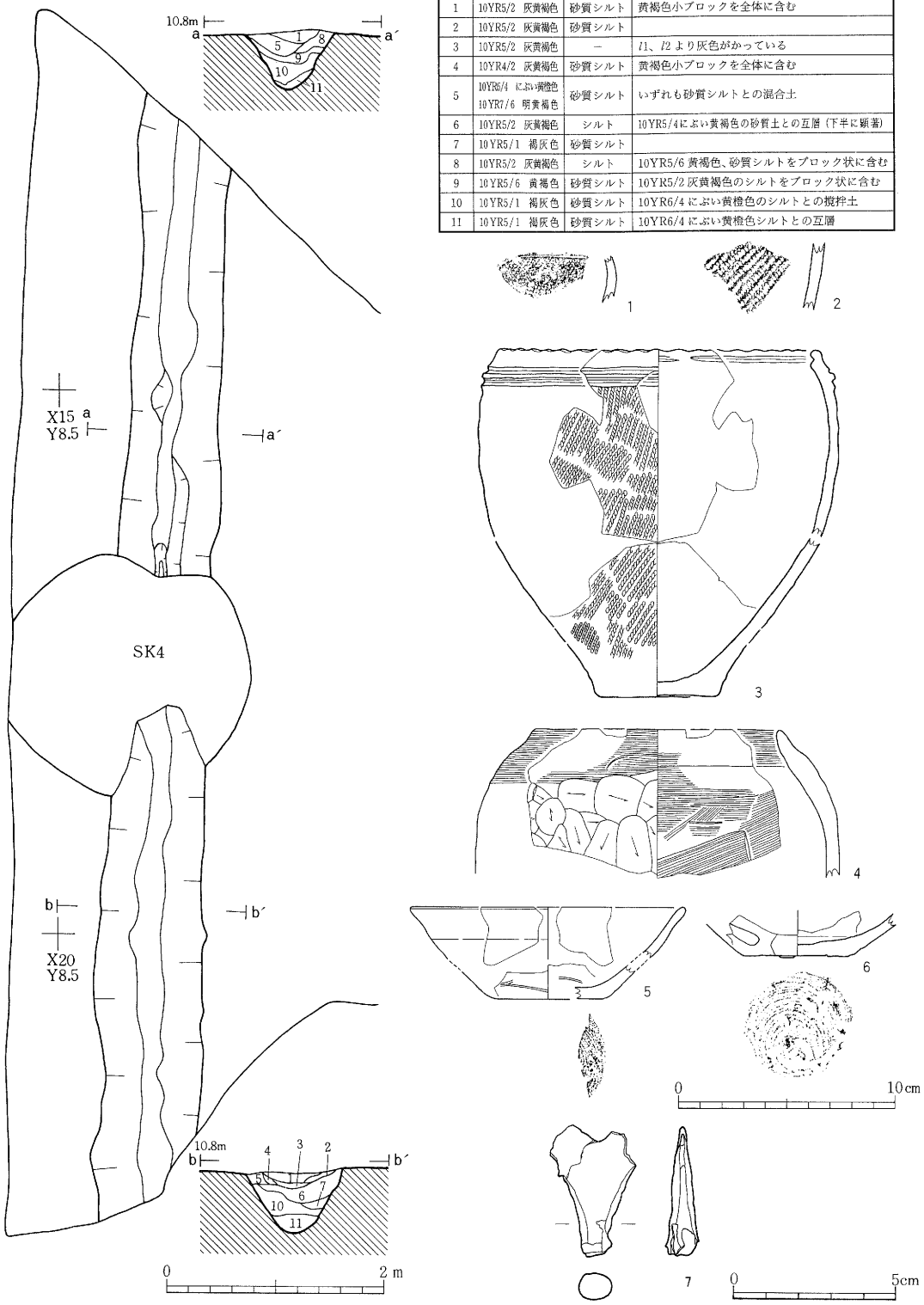
SD2　溝跡

［位置］調査区の西端、X9.5 ライン上にそって位置する。溝方向は真北に対して東に約13°偏している。

［遺構の確認］III層上面において検出した。SD2 は SK4 に切られている。

［形態・規模］調査区内約 10 m にわたって検出された溝の上端幅は 75～100 cm で、下端幅は 15～30 cm を測る。断面形は平均60°の壁面が立ち上がり、壁面と底面との区別はそう明瞭なものではない。プランは一直線状に延びており、形態からみても SD2 はかなり規格性をもった溝であることが窺われる。溝底面のレベルをみてみると、溝の北端と南端では約 10 cm のレベル差をもって北側部分が高くなっていることが分かるが、狭い範囲での検出のため、溝方向の特

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを全体に含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	
3	10YR5/2 灰黄褐色	—	1、2 より灰色がかっている
4	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを全体に含む
5	10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR7/6 明黄褐色	砂質シルト	いずれも砂質シルトとの混合土
6	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色の砂質土との互層（下半に顕著）
7	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	
8	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/6 黄褐色、砂質シルトをブロック状に含む
9	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	10YR5/2 灰黄褐色のシルトをブロック状に含む
10	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	10YR6/4 にぶい黄橙色のシルトとの攪拌土
11	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	10YR6/4 にぶい黄橙色シルトとの互層



第17図　ＳＤ２

図版 No	登録 No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
17-1	30	縄文土器	深鉢	SD2	埋土	縄文（R）、沈線文	ミガキ	－	－	－		7-3
17-2	31	縄文土器	深鉢	SD2	埋土	縄文（LR）	ミガキ	－	－	－		7-2
17-3	26	縄文土器	深鉢	SD2	埋土	縄文(LR)、沈線文、波状口縁	沈線文、ミガキ	(148)	54	(160)		7-1
17-4	27	土師器	甕	SD2	埋土	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	(112)	－	－		9-6
17-5	28	赤焼土器	坏	SD2	埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(127)	(52)	(43)	10c	11-17
17-6	25	赤焼土器	坏	SD2	6層	体部：ロクロナデ→ナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	46	－	10c	11-16
17-7	36	鉄鏃	雁又	SD2	埋土			長さ (残40)	最大幅 ×(残265)	最大厚 ×(10)		12-14

定は出来ない。

［堆積土］ 2か所において断面確認を行ったところ、11層の分層が可能であった。砂質シルトが主体を占め、幾層かにおいてはIII層がブロック状に入った混合層が見られることから、一部人為的に埋められたこともあるとの推測もできるが、定かではない。

［出土遺物］ 堆積土中より石器、縄文土器、非ロクロの土師器、須恵器、赤焼け土器、鉄鏃、鉄滓の出土があった。石器、縄文土器についてはこの付近にIII b層が存在することから、後に流入したものと考えられる。

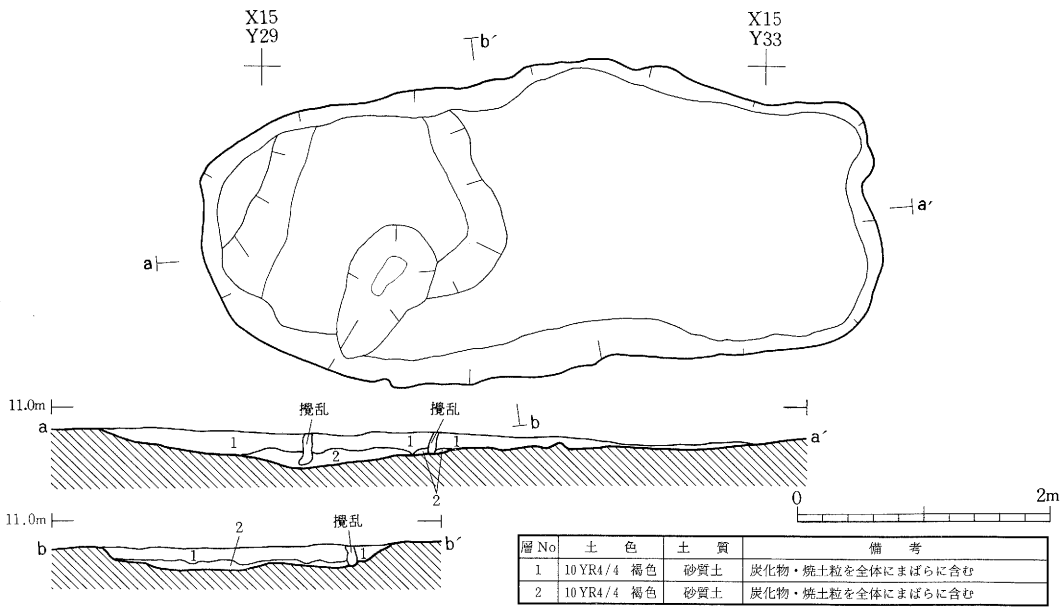
(4) 性格不明遺構とその出土遺物

性格不明遺構としたものはSXで表記しているが、ここでは遺構と認められるにもかかわらず、残存状況が極めて悪いものや、調査の制限上、全体を検出できず、形状も不明なものを掲載している。

SX1 性格不明遺構

［位置］ SD1の東隣、X16ライン．Y28～34の範囲に位置する。短軸方向は真北に対して東に約9°偏している。

［遺構の確認］ III層上面において検出した。SX1はP80、129、130を切っている。



層 No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4 褐色	砂質土	炭化物・焼土粒を全体にまばらに含む
2	10YR4/4 褐色	砂質土	炭化物・焼土粒を全体にまばらに含む

第18図　ＳＸ１

[形態・規模] 平面形はほぼ東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈し、長軸 540 cm、短軸 240 cm を測る。全体的に西半部分が低くなっているが、深さは 20 cm 前後の残存である。底面は特に起伏は無いが、東西壁ではかなり緩やかな傾斜をもったまま壁面として立ち上がるのに対して、西半部分の南北壁のみがやや角度をもって立ち上がるものとなっている。

[堆積土] 2 層に分層される。両層とも褐色の砂質土を主体とした層で、焼土、炭化物を全体に含んでいる。

[出土遺物] 堆積土中より非ロクロの土師器、須恵器が出土したが、確実に遺構に伴うと思われる遺物の出土は無かった。

SX2　性格不明遺構

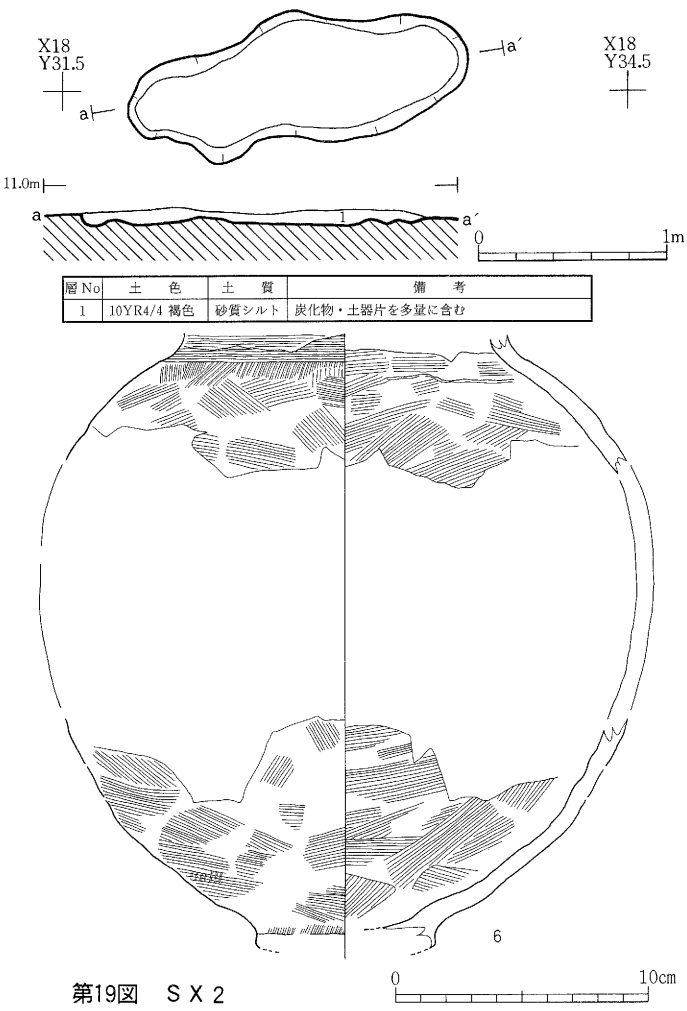
[位置] X18. Y33 付近に位置する。短軸方向は真北に対して東へ約 4 °偏している。

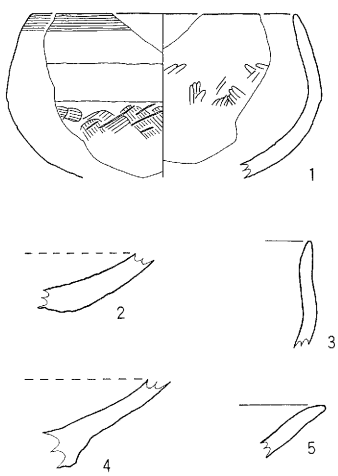
[遺構の確認] III層上面において検出した。

[形態・規模] 平面形は SX1 同様、長楕円形を呈し、長軸 180 cm、短軸 60 cm 程度を測るが、規模としては SX1 に比して小型である。底面は平坦でほぼ水平であるが、深さは全体的に 10 cm にも未たない。残存が少ない為に壁面の状況は不明である。

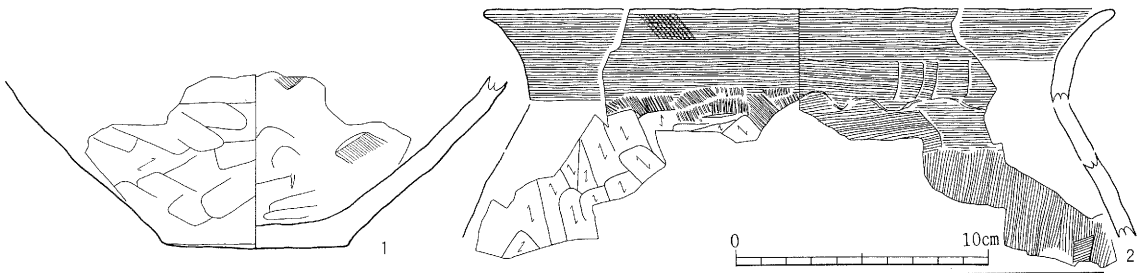
[堆積土] 褐色砂質シルトの 1 層のみが認められた。

[出土遺物] 堆積土中より剝片、





第19図　ＳＸ２



図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
19-1	54	土師器	坏	SX2	1層	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	ヘラミガキ	(106)	—	—		9-7
19-2	55	土師器	坏	SX2	1層	体部：ナデ	体部：ヘラミガキ	—	—	—		—
19-3	58	土師器	坏	SX2	1層	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラミガキ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラミガキ	—	—	—		9-8
19-4	56	土師器	甕	SX2	1層	体部：ヘラナデ	体部：ヘラナデ	—	—	—		9-12
19-5	59	土師器	甕	SX2	1層	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	—	—	—		—
19-6	53-3	土師器	甕	SX2	1層	口縁部：ヨコナデ,体部：ハケメ→ヘラナデ	体部：ヘラナデ	—	(72)	—		9-10
20-1	53-1	土師器	甕	SX2	1層	体部：ヘラケズリ→ナデ,底部：ヘラケズリ	体部：ヘラナデ・ナデ	—	(72)	—		9-11
20-2	53-2	土師器	甕	SX2	1層	口縁部：ハケメ→ヨコナデ?,頸部：ハケメ,体部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	(250)	—	—		9-9

第20図　ＳＸ２出土遺物

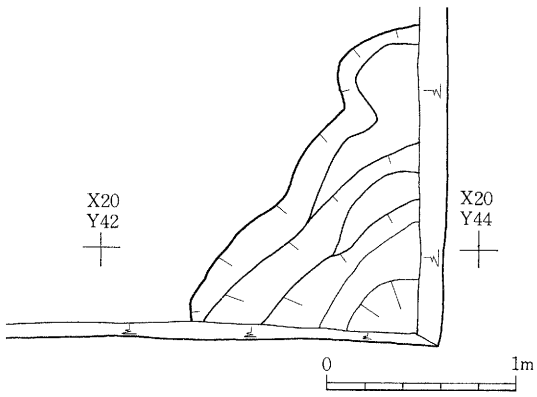
数個体分の非ロクロの土師器が出土した。SX2はこれら土師器の時期のものである可能性が強い。

SX3　性格不明遺構

［位置］調査区の東南端、X20. Y43付近に位置する。

［遺構の確認］IIｃ層の除去後、III層上面において検出した。プランはコーナー部において一部検出されたが、上層の堆積土量の多いことから全体の検出作業は行わなかった。SX3はII層の形成以前に掘られたものである。

［形態・規模］一部のみの検出のため、平面形、規模などについては不明である。底面も未検出であるが、検出面からの深さは80 cm以上である。壁面は約30°程で立ち上がり、途中僅かな平場をもつ箇所もある。



層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	褐色ブロックを多量含む
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	褐色ブロックを少量含む

第21図　ＳＸ３

［堆積土］掘り込んだ箇所において2層に分層された。層中にはIII層を小ブロック状に含んでいる。

SX4　性格不明遺構

［位置］X8. Y38付近に位置する。南北軸方向は真北に対して東へ約2°偏している。

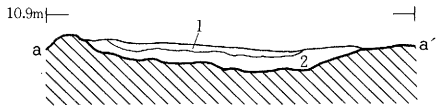
［遺構の確認］III層上面において検出した。プランが調査区東壁にかかっていたことから拡張したところ、東壁は天地返しにより失われていた。SX4はP29、125に切られている。

［形態・規模］残存部分から推定すると、平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北軸で140cm、東西軸で110 cm以上である。底面はほぼ平坦、水平で、深さは平均して10 cm程度である。

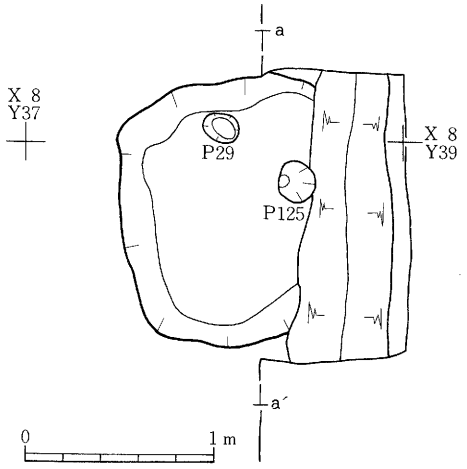
壁面は底面と明瞭な境のないまま緩やかに立ち上がるものとなっている。

［堆積土］2層に分層される。両層とも黄褐色砂質シルトで自然堆積と考えられる。

［出土遺物］堆積土中より非ロクロの土師器が出土した。



層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰色、黄褐色小ブロックを全体に含む



第22図　ＳＸ４

SX5　性格不明遺構

［位置］X20. Y23 付近に位置する。長軸方向は真北に対して東へ約16°偏している。

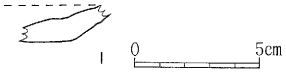
［遺構の確認］III層上面において検出した。プランは調査区南壁にかかる形で検出されたが、調査区の拡張は行わなかった。

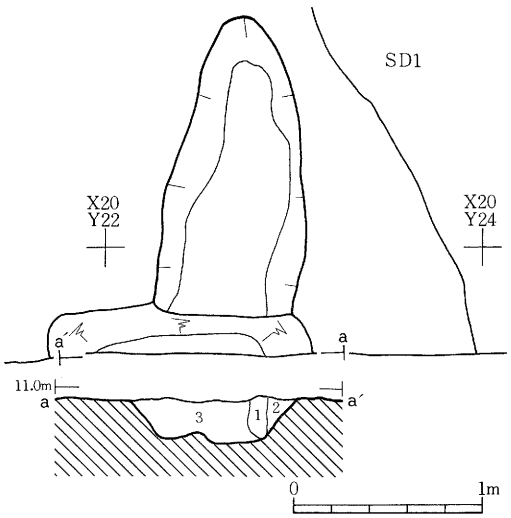
［形態・規模］検出した箇所のみでの平面形は先細りの長楕円形を呈する。長軸 210 cm 以上、短軸 75 cm を最大とし、南壁における断面確認においては深さ 20 cm 程のものである。底面は平坦で水平であるが、南壁近くではわりと急な立ち上がりをみせる壁面も、北半部分についてはかなり緩やかとなり、深さも浅いものとなる。

［堆積土］3層に分層された。1層としてほぼ垂直に立つ層が見られたことより、当初SX5は柱穴の可能性も考えられたが、形態からみてその可能性は低く、別のピット状のものが重複していることも考えられる。

［出土遺物］堆積土中より石器、非ロクロの土師器が出土した。

層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを密に含む
2	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを全体に含む
3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	灰白色ブロックを全体に含むが割と均質土





図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
23-1	63	土師器	坏	SX5	1層	体部下端：ヘラケズリ	ナデ	－	－	－		－

第23図　ＳＸ５

(5) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は多数検出されたピットのなかで規則性をもって配列しているものから、合計3棟が復元された。ピットの形状、深さ、堆積土の状況などは多種多様であるが、3棟以外にもほぼ等間隔をもって一列に並ぶものも幾つか認められる（P71. 130. 80. 79. 33 や P55. 50. 44. 131 など）。また北側張り出し区のように、ピットが集中し、掘り方を伴うものも幾つかある地点があるが、調査区の制限上、建物の認定までは至っていない。

3棟の掘立柱建物跡の方向はいづれも東西棟の建物であり、この方向は SD1 やII層堆積部分の段差の方向とも一致しており、これらとの関連性も考えられるものである。

SB1　掘立柱建物跡

桁行3間で、柱間が 265～308 cm、梁行1間で、柱間が 380～390 cm の東西棟建物跡である。北東コーナーは畑作による天地返し、南西コーナーは調査区外のため検出できなかった。梁行柱列方向は真北に対して西へ12°偏している。P129 が SX1 に切られていることから、SB1 は SX1 より古いものと考えられる。柱穴は径 30～18 cm の円形が主で、深さは 46～20 cm を測り、P62 には柱痕跡が見られる。P49 堆積土中より非ロクロの土師器が出土した。

SB2　掘立柱建物跡

桁行5間で、柱間が 225～234 cm と見られ、梁行2間で、柱間が 252～330 cm の東西棟建物跡である。北側桁柱列は天地返しのためにほとんど検出されなかった。梁行方向は真北に対して西に14°偏している。柱穴は径 41～19 cm の円形が主で、深さは 38～14 cm を測る。P41 堆積土中より土師質土器の坏が、また P73 堆積土中より非ロクロの土師器甕が出土した。

SB3　掘立柱建物跡

桁行4間で、柱間が 220～283 cm、梁行4間で、柱間が 165～190 cm の東西棟建物跡である。梁行方向は真北に対して西に12°偏している。柱穴は径 75～17 cm の円形が主で、深さは 9～46 cm を測り、P121 には柱痕跡が見られる。P133 は他のピットよりやや大きめで、底面には偏平な円礫が敷設されていた。この P133 が SK3 に切られていることから、SB3 は SK3 より古いものと考えられる。

(6) ピットとその出土遺物

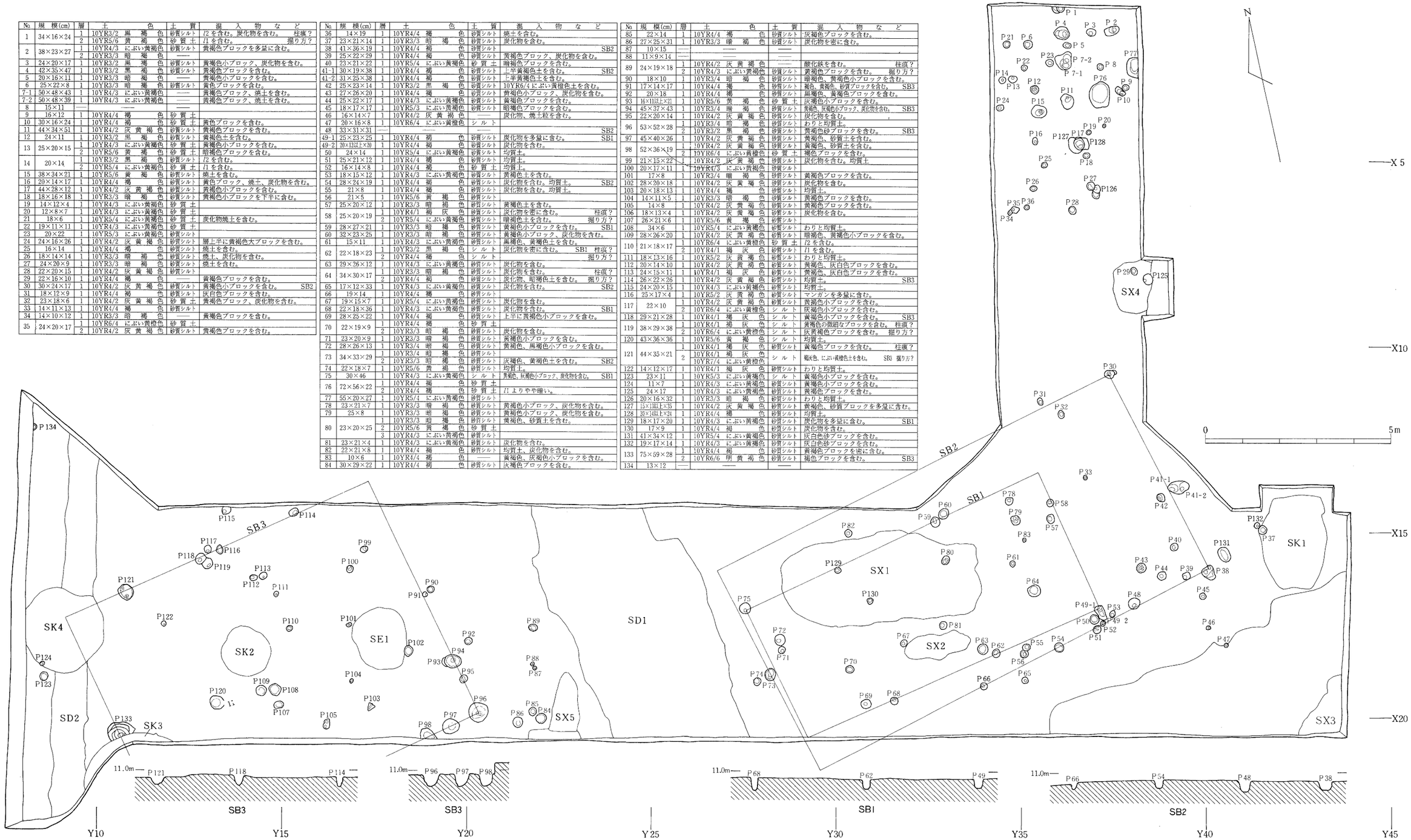
調査においては、土壙、性格不明遺構と区別されるものとして、小穴、或るいは柱痕の可能性のあるものについて、ピットと呼称して記録化している。ピットは形状や底面の様子、堆積土の状況などに留意しつつ認定していったものであり、明らかに後世の攪乱や木根などによる攪乱と判断できるものについては除外している。

ピットは全部で137検出している。ほぼ全体にみられる状況にあるが、III層上面での検出では、SD1 の堆積土上や、南東コーナー部のII層堆積土上においては全く検出されていない。またI

№	規模(cm)	層	土色	土質	混入物など
1	34×16×24	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	12を含む。炭化物を含む。 柱痕？
		2	10YR5/6 黄褐色	砂質土	11を含む。 掘り方？
2	38×23×27	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを多量に含む。
		2	10YR3/3 暗褐色	——	
3	24×20×17	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロック、炭化物を含む。
4	42×35×47	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
5	20×16×11	1	10YR3/3 暗褐色	——	黄褐色小ブロックを含む。
6	25×22×8	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄色ブロックを含む。
7-1	50×48×43	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	——	黄褐色ブロック、焼土を含む。
7-2	50×48×39	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	——	黄褐色ブロック、焼土を含む。
8	15×11	—	——	——	——
9	16×12	1	10YR4/4 褐色	砂質土	
10	30×16×24	1	10YR4/4 褐色	砂質土	黄色ブロックを含む。
11	44×34×51	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
12	24×11	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色土を含む。
13	25×20×15	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質土	黄褐色小ブロックを含む。
		2	10YR5/6 黄褐色	砂質土	暗褐色ブロックを含む。
14	20×14	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	12を含む。
		2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	11を含む。
15	38×34×21	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	焼土を含む。
16	20×14×17	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄色ブロック、焼土、炭化物を含む。
17	44×28×12	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。
18	18×16×18	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを下半に含む。
19	14×12×4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質土	
20	12×8×7	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質土	
21	18×6	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	炭化物焼土を含む。
22	19×11×11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質土	
23	20×22	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
24	24×16×26	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	層上半に黄褐色大ブロックを含む。
25	16×14	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	焼土を含む。
26	18×14×14	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土、炭化物を含む。
27	24×20×9	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土を含む。
28	22×20×15	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	
29	22×16×10	1	10YR4/4 褐色	——	黄褐色ブロックを含む。
30	30×24×17	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。 SB2
31	18×12×9	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	灰白色ブロックを含む。
32	23×18×6	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質土	黄褐色ブロック、炭化物を含む。
33	14×11×13	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
34	14×10×12	1	10YR3/3 暗褐色	——	黄褐色ブロックを含む。
35	24×20×17	1	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質土	
		2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。

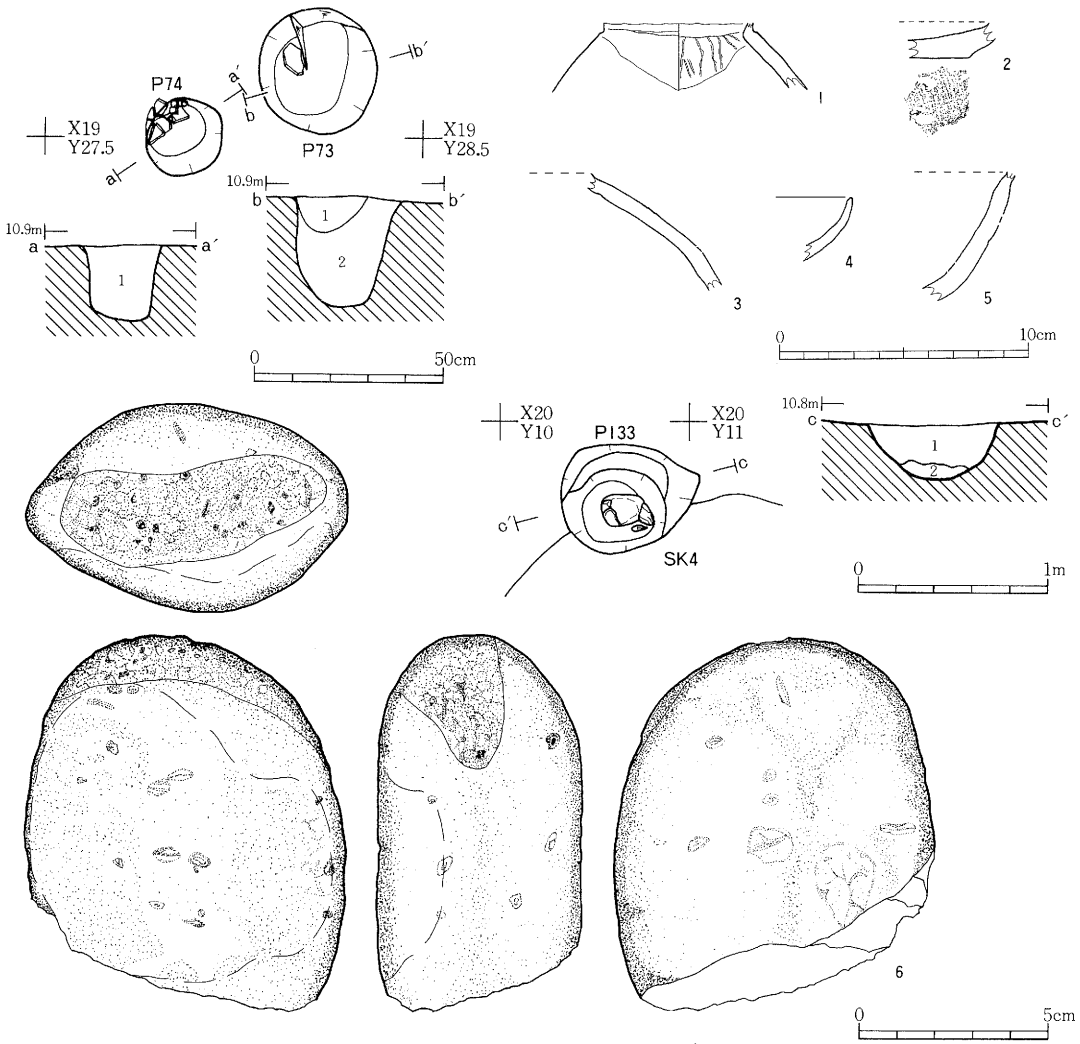
№	規模(cm)	層	土色	土質	混入物など
36	14×19	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	焼土を含む。
37	23×21×14	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
38	41×36×19	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	SB2
39	25×22×29	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄褐色ブロック、炭化物を含む。
40	23×21×22	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質土	暗褐色ブロックを含む。
41-1	30×19×38	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	上半黄褐色土を含む。 SB2
41-2	31×25×38	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	上半黄褐色土を含む。
42	25×23×14	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	10YR6/4 にぶい黄橙色土を含む。
43	27×26×20	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロック、炭化物を含む。
44	25×22×17	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
45	18×12×17	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色ブロックを含む。
46	16×14×7	1	10YR4/2 灰黄褐色	——	炭化物、焼土粒を含む。
47	20×16×8	1	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	
48	33×31×31	—	——	——	SB2
49-1	25×23×25	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。 SB1
49-2	20×12以上×20	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
50	24×14	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	均質土。
51	25×21×12	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	均質土。
52	16×14×8	1	10YR4/4 褐色	砂質土	均質土。
53	18×15×12	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色土を含む。
54	28×24×19	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物を含む。均質土。 SB2
55	21×8	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物を含む。均質土。
56	21×5	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
57	25×20×12	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色土を含む。
58	25×20×19	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物を密に含む。 柱痕？
		2	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色土を含む。 掘り方？
59	28×27×21	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。 SB1
60	32×23×25	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロック、炭化物を含む。
61	15×11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色、黄褐色土を含む。
62	22×18×23	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を密に含む。 SB1 柱痕？
		2	10YR4/4 褐色	シルト	掘り方？
63	29×26×12	1	10YR3/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
64	34×30×17	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む。 柱痕？
		2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物、暗褐色土を含む。 掘り方？
65	17×12×33	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。 SB2
66	19×14	1	10YR4/3 褐色	砂質シルト	
67	19×15×7	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
68	22×18×36	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。 SB1
69	28×25×22	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	上半に黄褐色小ブロックを含む。
70	22×19×9	1	10YR4/4 褐色	砂質土	
		2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
71	23×20×9	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。
72	28×26×13	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	黄褐色、黒褐色小ブロックを含む。
73	34×33×29	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	
		2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	灰褐色、黄褐色土を含む。 SB2
74	22×18×7	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	均質土。
75	30×46	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色、灰褐色小ブロック、炭化物を含む。 SB1
76	72×56×22	1	10YR4/4 褐色	砂質土	
		2	10YR4/4 褐色	砂質土	11よりやや暗い。
77	55×20×27	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	
78	23×21×7	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロック、炭化物を含む。
79	25×8	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロック、炭化物を含む。
80	23×20×25	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色、砂質土を含む。
		2	10YR5/6 黄褐色	砂質土	
		3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
81	23×21×4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
82	22×21×8	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	均質土、炭化物を含む。
83	10×6	1	10YR4/4 褐色	——	黄褐色、灰褐色小ブロックを含む。
84	30×29×22	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	灰褐色ブロックを含む。

№	規模(cm)	層	土色	土質	混入物など
85	22×14	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	灰褐色ブロックを含む。
86	27×25×31	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	炭化物を密に含む。
87	10×15	—	——	——	
88	11×9×14	—	——	——	
89	24×19×18	1	10YR4/2 灰黄褐色	——	酸化鉄を含む。 柱痕？
		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。 掘り方？
90	18×10	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	暗褐色、黄褐色小ブロックを含む。
91	17×14×17	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	褐色、黄褐色、砂質ブロックを含む。 SB3
92	20×18	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黒褐色、黄褐色ブロックを含む。
93	16×11以上×21	1	10YR5/6 黄褐色	砂質土	灰褐色小ブロックを含む。
94	45×37×43	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	褐色、灰褐色ブロック、炭化物を含む。 SB3
95	22×20×14	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
96	53×52×28	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	わりと均質土。
		2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	黄褐色砂ブロックを含む。 SB3
97	45×40×26	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色、砂質土を含む。
98	52×36×19	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色、砂質土を含む。
		2	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質土	褐色ブロックを含む。
99	21×15×22	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。均質土
100	20×17×11	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
101	17×8	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
102	28×20×18	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
103	20×18×13	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	均質土。
104	14×11×5	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
105	14×8	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
106	18×13×4	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
107	26×21×6	1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
108	34×6	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	わりと均質土。
109	28×36×20	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	暗褐色、黄褐色小ブロックを含む。
110	21×18×17	1	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質土	12を含む。
		2	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	11を含む。
111	18×13×16	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	わりと均質土。
112	20×14×10	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色、灰白色ブロックを含む。
113	24×15×11	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	黄褐色、灰白色ブロックを含む。
114	26×22×26	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	均質土。 SB3
115	24×20×15	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	均質土。
116	25×17×4	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	マンガンを多量に含む。
117	22×10	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。
		2	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	灰褐色小ブロックを含む。
118	29×21×28	1	10YR4/1 褐灰色	シルト	黄褐色小ブロックを含む。 SB3
119	38×29×38	1	10YR4/1 褐灰色	シルト	黄褐色の微細なブロックを含む。 柱痕？
		2	10YR6/4 にぶい黄橙色	シルト	灰黄褐色ブロックを含む。 掘り方？
120	43×36×36	1	10YR5/6 黄褐色	シルト	均質土。
121	44×35×21	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。 柱痕？
		2	10YR7/1 褐灰色	シルト	褐灰色、にぶい黄橙色土を含む。 SB3 掘り方？
122	14×12×17	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	わりと均質土。
123	23×11	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色小ブロックを含む。
124	11×7	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色小ブロックを含む。
125	24×17	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む。
126	20×16×32	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	わりと均質土。
127	15×13以上×35	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	黄褐色、砂質ブロックを多量に含む。
128	35×13以上×24	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	均質土。
129	18×17×20	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む。 SB1
130	17×9	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
131	41×34×12	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰白色砂ブロックを含む。
132	19×17×14	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰白色砂ブロックを含む。
133	75×59×28	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを密に含む。
		2	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	褐色ブロックを含む。 SB3
134	13×12	—	——	——	——



第24図　掘立柱建物跡とピット、ピット註記表

c層の天地返しによる攪乱が著しい箇所の北側張出し区の中程や、北壁際全体、SD1より西側部分についても、III層面がかなり削平されており、検出数は少ない。他の遺構との切合いを見ると、ピットを切っているものには、SK1、3、SE1、SX1が見られ、逆にピットがプラン上に検出されたものは、SX4がある。ピットの中には、その配列状況から掘立柱建物跡の一部であると判断されたものも多数あるが、組み合わなかったもの以外にも柱穴であるものも多いと考えられる。しかしながら、以上のもの全てが同一時期とは限らず、柱穴以外の性格を有するものも多いと考えられる。



図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
25-1	68	土師器	小型壺	P49 (SB1)	1層	ナデ		—	—	—		9-13
25-2	66	土師器	坏	P18	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	黒色処理	—	—	—		11-3
25-3	69	土師器	甕	P73 (SB2)	底面	ナデ	ナデ	—	—	—		—
25-4	67	土師質土器	皿	P41 (SB2)	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		11-9
25-5	64	土師器	坏	P7	1層			—	—	—		—

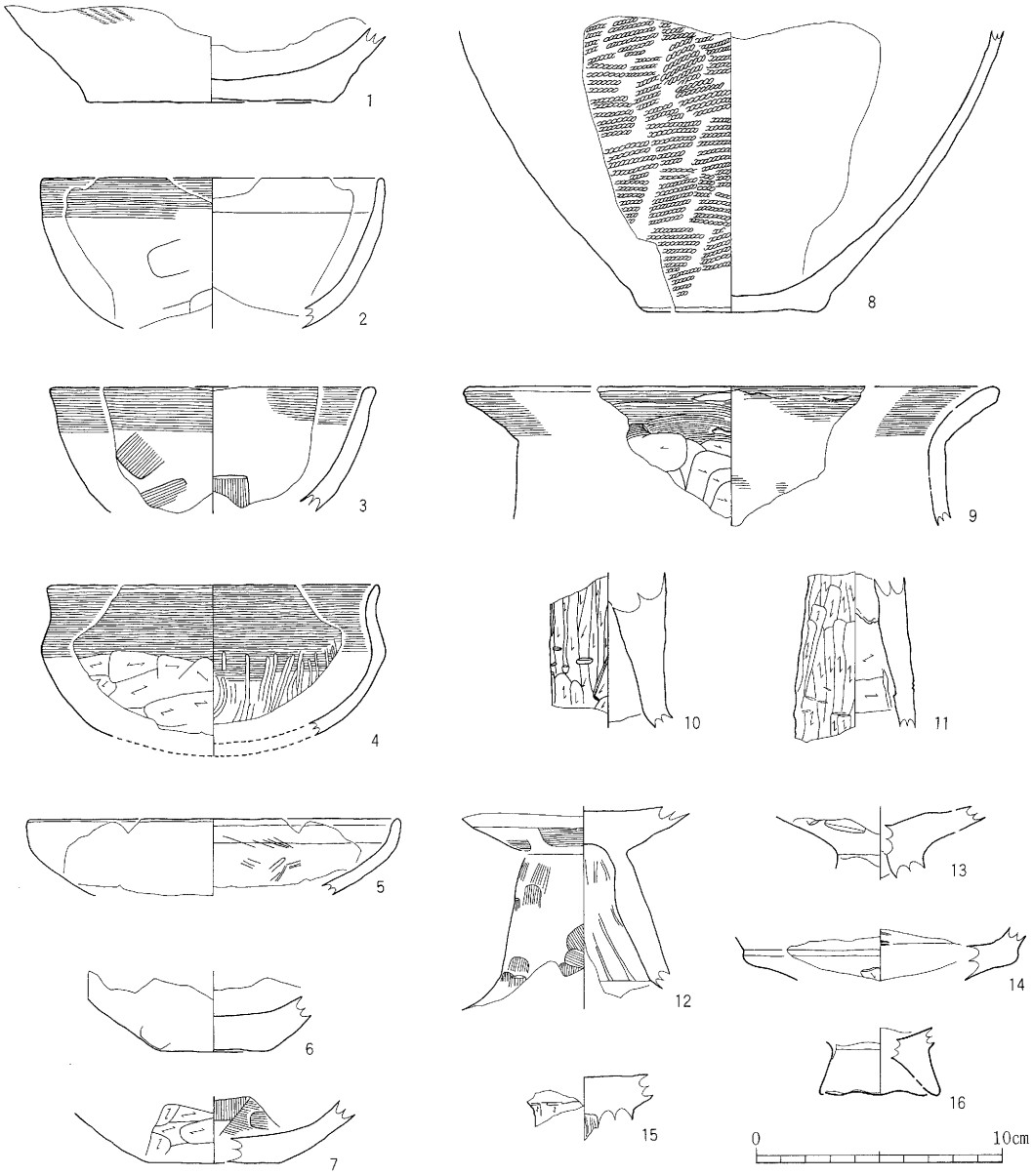
図版No	登録No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
25-6	10	礫石器	P133 (SB3)	2層	残99×85×54	598.8	石英安山岩	磨：片面、敲：側面		8-16

第25図　ピット

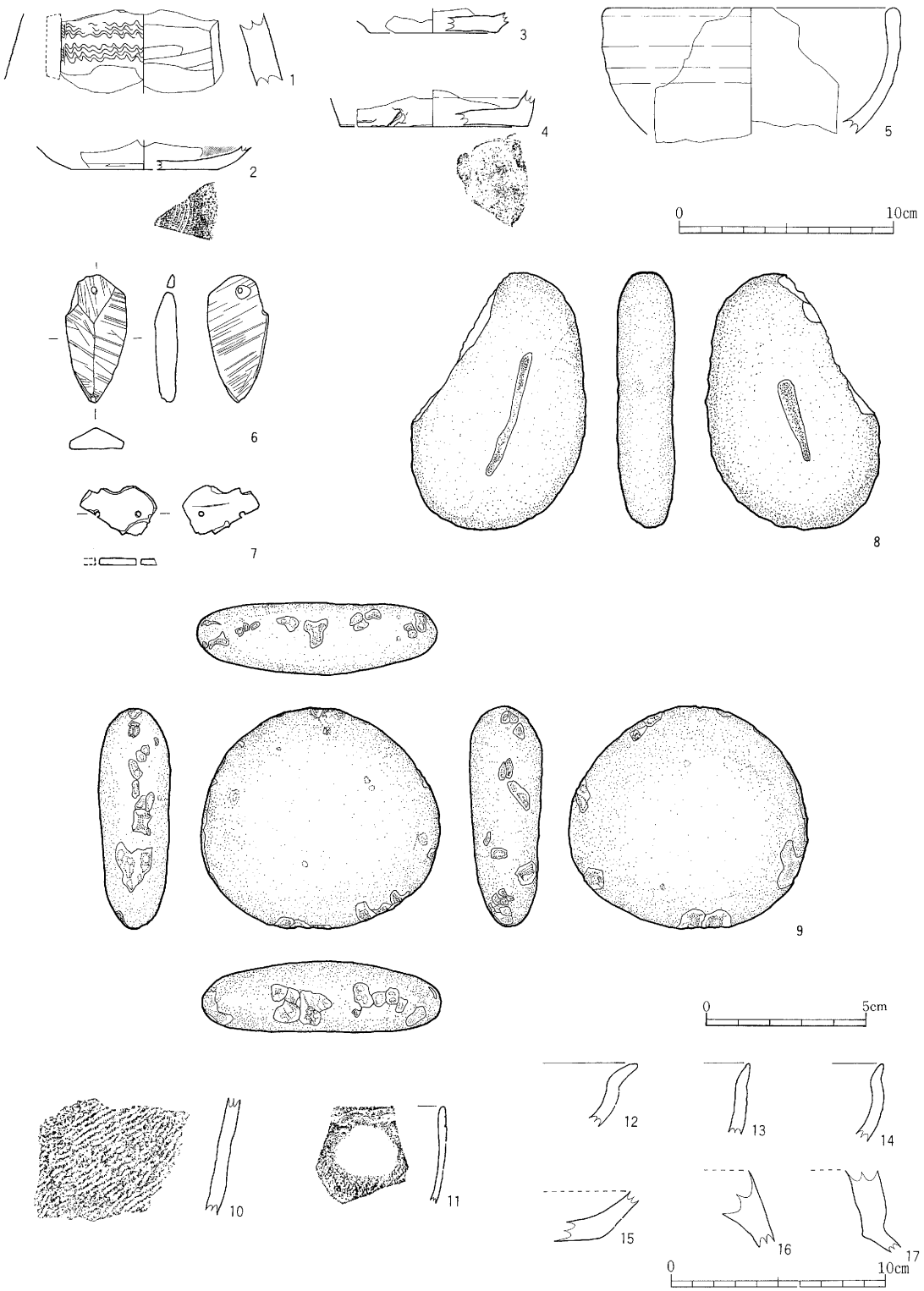
(7) 遺構以外からの出土遺物

Ⅰ．Ⅰ層出土の遺物

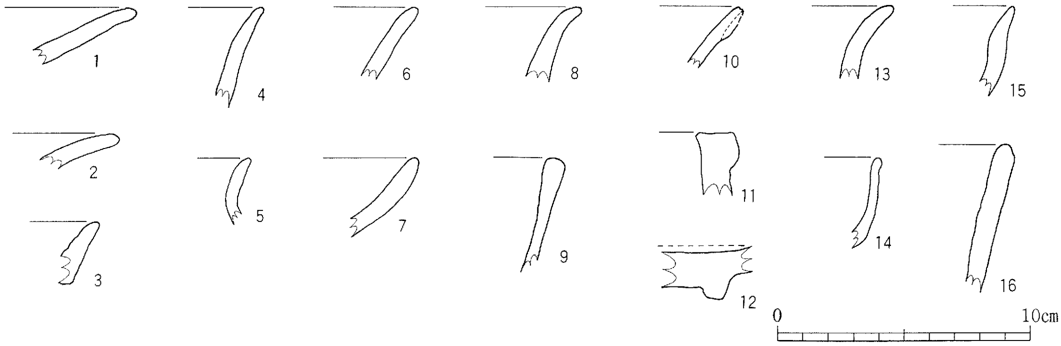
Ⅰa～c層は最近までの耕作により、遺構中及びII、III層中に包含されていた遺物をかなり攪乱している。Ⅰ層は重機で除去したことにより、ここで図示する遺物は主としてIII層上面の遺構検出作業時に採取したものであり、取り上げはグリットごとに行っているが、遺物本来の位置は失っているものである。採取遺物としては、縄文土器、非ロクロの土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、石器、石製模造品、古銭、鉄塊がある。



第26図　Ⅰ層出土遺物（1）



第27図　Ⅰ層出土遺物（２）



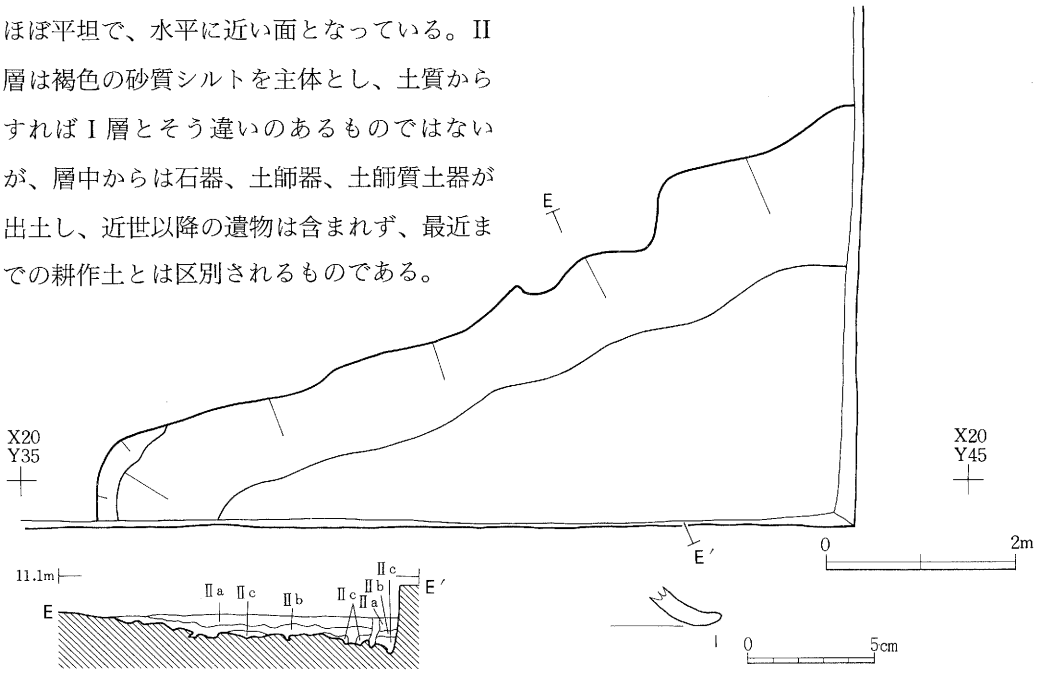
図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
26-1	76	縄文土器	―	X15 Y11	L1	縄文(L)		―	100	―		7-5
26-2	90	土師器	坏	X15 Y30	L1	口縁部：ヨコナデ		(138)	―	―		10-2
26-3	112	土師器	坏	―	L1	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	(130)	―	―		10-4
26-4	88	土師器	坏	X15 Y30	L1	口縁部～体部上半：ヨコナデ→体部下半：ヘラケズリ	口縁部～体部上半：ヨコナデ→体部下半：ヘラミガキ	(135)	―	(70)		10-1
26-5	94	土師器	坏	X15 Y35	L1		体部：ヘラミガキ	(150)	―	―		―
26-6	97	土師器	甕	X15 Y35	L1	ナデ		―	(42)	―		―
26-7	111	土師器	甕	―	L1	体部下端：ヘラケズリ	体部下端：ヘラナデ	―	(52)	―		―
26-8	77	縄文土器	深鉢	X15 Y11	L1	縄文(LR)	ミガキ	―	70	―		7-7
26-9	101	土師器	甕	X15 Y35	L1	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ	(213)	―	―		10-13
26-10	82	土師器	高坏	X15 Y25	L1	脚部：ヘラケズリ	脚部：ナデ	―	―	―	脚径 46 mm	10-16
26-11	84	土師器	高坏	X15 Y30	L1	脚部：ヘラケズリ	脚部：ヘラケズリ	―	―	―		10-15
26-12	100	土師器	高坏	X15 Y35	L1	坏底部：ヘラナデ、脚部：ヘラナデ	脚部：絞り目	―	―	―		10-14
26-13	102	土師器	高坏	X15 Y35	L1	体部下端：ヘラケズリ		―	―	―		10-17
26-14	122	土師器	高坏	―	L1	坏部下端：ヘラケズリ		―	―	―		―
26-15	124	土師器	高坏	―	L1	脚部：ヘラケズリ	脚部：絞り目	―	―	―		―
26-16	110	土師器	?	―	L1			48	―	―		10-18
27-1	105	須恵器	器台 or 台付壺	―	L1	ロクロナデ	ロクロナデ→ナデ	―	―	―	透し孔、外面に波状沈線	11-2
27-2	80	土師器	坏	X15 Y20	L1	ロクロナデ→一部回転ヘラケズリ、底部：回転糸切り	ロクロナデ、黒色処理	―	(69)	―		11-4
27-3	91	土師質土器	皿	X15 Y30	L1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	―	(60)	―	中世？	11-11
27-4	79	土師質土器	小甕	X15 Y20	L1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	―	(88)	―		11-10
27-5	70	陶器	鉢	X15 Y5	L1	海鼠釉、ロクロナデ	海鼠釉、ロクロナデ	(132)	―	―	堤焼、19c?	12-4
27-10	72	縄文土器	深鉢	X15 Y10	L1	縄文(L)	ミガキ	―	―	―		7-6
27-11	123	縄文土器	深鉢	―	L1	縄文、ナデ	ミガキ	―	―	―		7-4
27-12	93	土師器	坏	X15 Y30	L1	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	―	―	―		9-15
27-13	121	土師器	坏	―	L1			―	―	―		10-7
27-14	116	土師器	坏	―	L1	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁部：ヘラナデ、体部：ナデ	―	―	―		9-18
27-15	107	土師器	坏	―	L1		黒色処理	―	―	―		―
27-16	115	土師器	高坏	―	L1	脚部：ヘラナデ		―	―	―		―
27-17	117	土師器	高坏	―	L1	脚部：ナデ	脚部：絞り目	―	―	―		―
28-1	92	土師器	壺	X15 Y30	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―		10-5
28-2	103	土師器	壺	X15 Y35	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―		10-6
28-3	96	土師器	壺	X15 Y35	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―	複合口縁	10-10
28-4	98	土師器	甕	X15 Y35	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―		10-8
28-5	119	土師器	小型甕	―	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―		10-11
28-6	99	土師器	坏	X15 Y35	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ、	―	―	―		9-17
28-7	86	土師器	坏	X15 Y30	L1	ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	―	―	―		9-14
28-8	125	土師器	坏	―	L1			―	―	―		10-3
28-9	127	土師質土器	鉢	―	L1	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―		11-14
28-10	83	土師器	壺	X15 Y30	L1			―	―	―	複合口縁	10-9
28-11	108	瓦質土器	鉢	―	L1	ロクロナデ、黒色処理	ロクロナデ、黒色処理	―	―	―	近世	11-19
28-12	78	磁器(青磁)	碗	X15 Y20	L1			―	―	―	見込に文様あり、龍泉窯系、13～14c	12-8
28-13	118	土師器	甕	―	L1	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	―	―	―		10-12
28-14	120	土師質土器	鉢	―	L1	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―		11-12
28-15	95	土師器	坏	X15 Y35	L1			―	―	―		9-16
28-16	114	土師質土器	鉢	―	L1	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―		11-13

図版No	登録No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
27-6	87	有孔剣形模造品	X15 Y30	L1	40×19×6.5	6.1	粘板岩		貫通孔1か所	12-13
27-7	106	有孔円板模造品	―	L1	径22以上×2	0.8	粘板岩		貫通孔2か所	12-12
27-8	128	礫石器	―	L1	80×54×18	59.5	石英安山岩質凝灰岩	線刻？：両面		8-17
27-9	129	礫石器	―	L1	68.5×74.5×22.5	166.3	石英安山岩	敲：側面		8-18

第28図　Ⅰ層出土遺物（3）

2．II層出土の遺物

II a～c 層は調査区の南東コーナー部に 20 m²足らずの狭い範囲で認められた。II層を除去するとIII層面が段差を形成しており、この箇所は他のIII層面に対してレベルが低い所となっている。段差部分は緩い傾斜で幅 100～130 cm、低レベル部分までの深さは 25～30 cm で、底面はほぼ平坦で、水平に近い面となっている。II層は褐色の砂質シルトを主体とし、土質からすればI層とそう違いのあるものではないが、層中からは石器、土師器、土師質土器が出土し、近世以降の遺物は含まれず、最近までの耕作土とは区別されるものである。

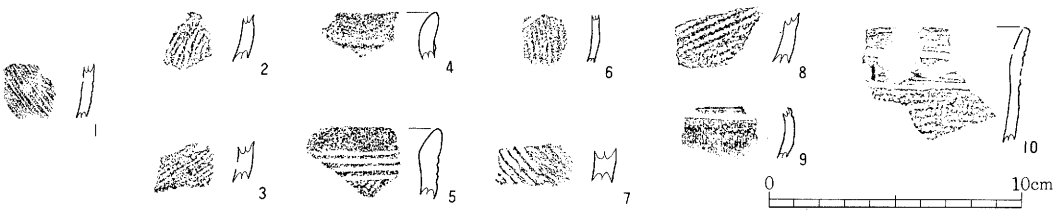


図版 No	登録 No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
29-1	132	土師器	高坏	—	L2c	脚裾部：ヨコナデ	脚裾部：ヨコナデ	—	—	—		10-19

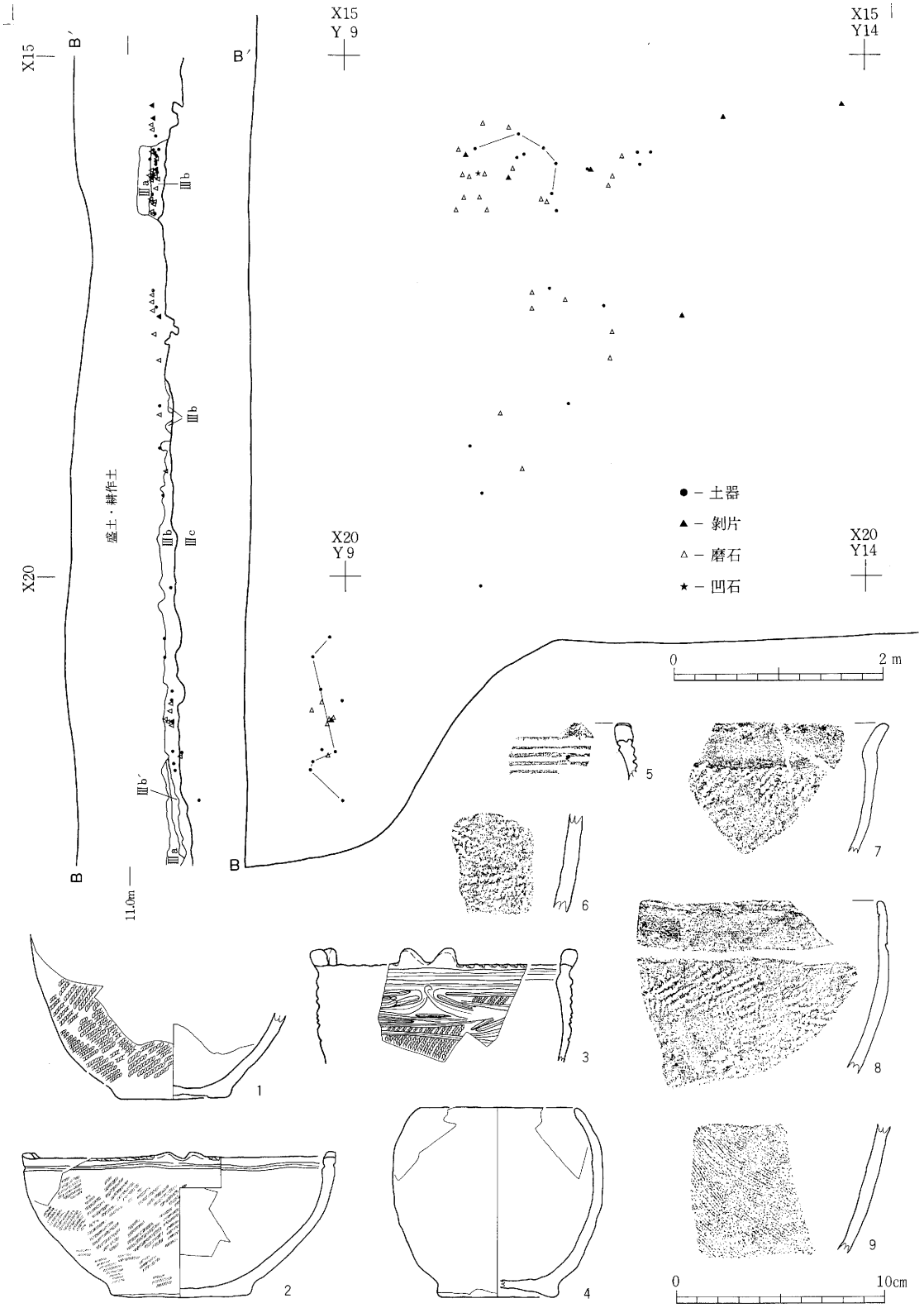
第29図　南東コーナー部分

3．III層出土の遺物

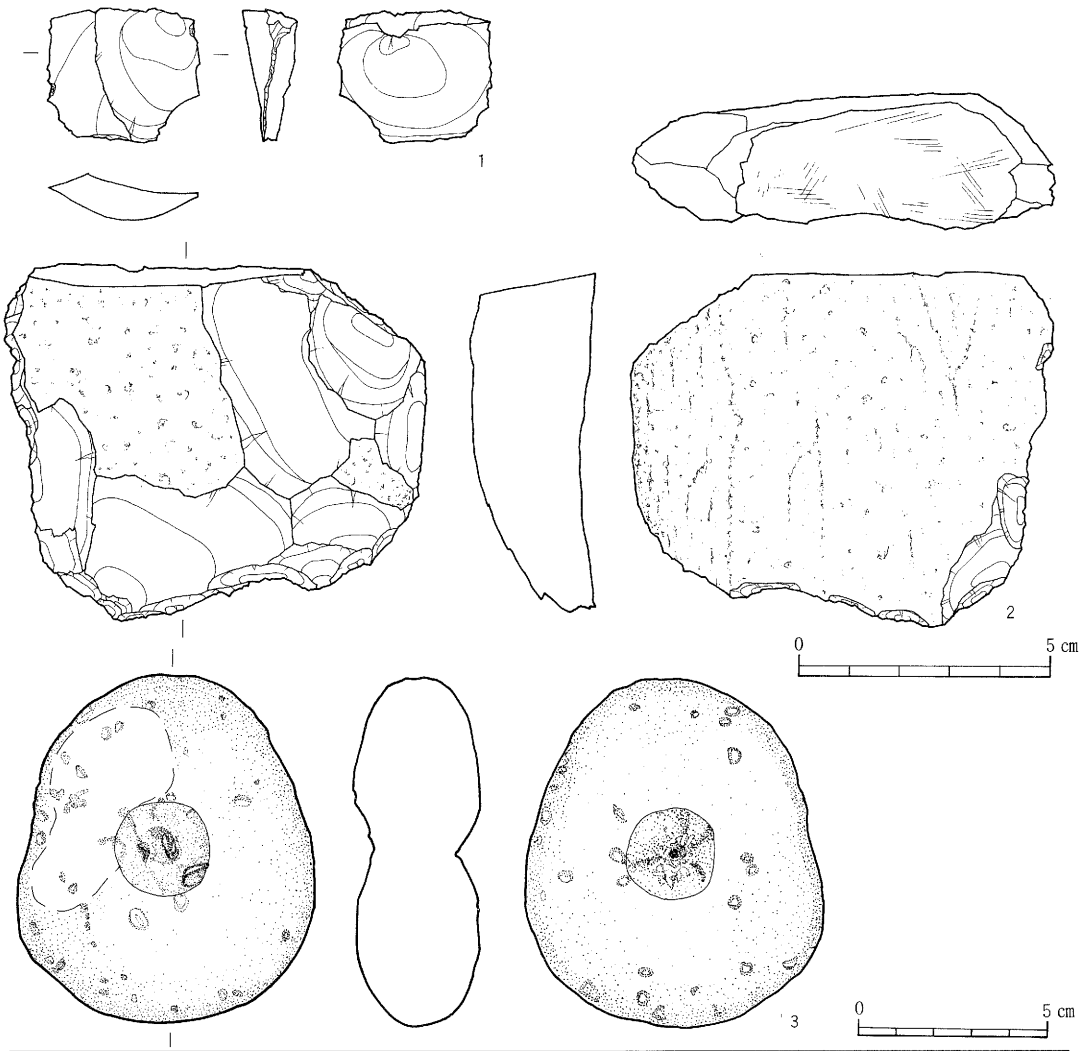
ここで言うIII層は、にぶい黄褐色を主体とした南小泉遺跡の遺構検出面である。今回の調査ではIII層がIII a、b′、b、c の 4 層に分層され、III a、b、c の各層から遺物の出土が見られた。遺物の大部分はIII b 層からの出土であり、遺物の分布範囲は約 10 m²程度で、他域については上層による攪乱の為、失われたものと考えられる。層中からは縄文土器、凹石、磨石、微細剥離痕のある石器、多くの剥片の他に、熱を受けた礫が出土している。遺構の検出こそ無かったものの、これらの遺物はわりと集中してみつかったことから、これら遺物の包含層のみならず、この時期の遺構の存在も十分に考えられる。



第30図　III層出土遺物（1）



第31図　Ⅲ層遺物出土状況、Ⅲ層出土遺物（2）



図版No	登録No	種別	器形	遺構・グリット	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考	写真図版
30-1	133	縄文土器	深鉢	X15.89 Y10.93	L3a	櫛目文	ナデ	—	—	—		7-8
30-2	135	縄文土器	深鉢	X15 Y10	L3b	縄文（L）	ミガキ	—	—	—		8-1
30-3	147	縄文土器	深鉢	X15.98 Y10.66	L3b	撚糸（R）	ミガキ	—	—	—		8-2
30-4	155	縄文土器	深鉢？	X16.50 Y11.05	L3b	隆線文	不明	—	—	—		8-3
30-5	156	縄文土器	深鉢	X16.10 Y11.34	L3b	沈線文	不明	—	—	—		8-4
30-6	162	縄文土器	深鉢	X17.41 Y11.49	L3b	縄文（LR）、沈線文	ミガキ	—	—	—		8-5
30-7	166	縄文土器	深鉢	X18.76 Y10.20	L3b	縄文（L）	ナデ	—	—	—		8-6
30-8	169	縄文土器	深鉢	X20.77 Y8.69	L3b	縄文（LR）	ミガキ	—	—	—		8-7
30-9	170	縄文土器	深鉢	X21.09 Y8.76	L3b	縄文（R）、沈線文	ミガキ	—	—	—	NO.30と同一個体？	8-10
30-10	165	縄文土器	深鉢	X18.35 Y11.15	L3b	縄文（LR）、沈線文	沈線文、ナデ	—	—	—		7-11
31-1	178	縄文土器	深鉢	X15.98 Y11.88	L3c	縄文（LR）	ミガキ	—	52	—		8-12
31-2	134	縄文土器	浅鉢	X15 Y10	L3b	縄文（L）、沈線文、口唇部に刻み、口縁部に2個1対の突起4つ	沈線文、ミガキ	(150)	67	70		7-10
31-3	177	縄文土器	深鉢	—	L3b	縄文（LR）、沈線文、ミガキ、口縁部に2個1対の突起、口唇部に刻み	沈線文、ミガキ	(128)	—	—		7-9
31-4	176	縄文土器	小型壺	X15 Y10	L3b	ナデ	ナデ	(76)	(54)	91		7-14
31-5	171	縄文土器	深鉢	X21.18 Y8.97	L3b	口唇部に沈線、突起頂部に刻み、沈線文、ミガキ	沈線文、ミガキ	—	—	—	NO.30と同一個体？	8-11
31-6	167	縄文土器	深鉢	X19.21 Y10.31	L3b	縄文（RL）	ミガキ	—	—	—		8-9
31-7	174	縄文土器	深鉢	X21.65 Y8.77	L3b	縄文（LR）、ミガキ	ミガキ	—	—	—		7-13
31-8	168	縄文土器	深鉢	X20.10 Y10.30	L3b	縄文（LR）、沈線文、ミガキ	沈線文、ミガキ	—	—	—		7-12
31-9	139	縄文土器	深鉢	X15 Y10	L3b	撚糸（R）	ミガキ	—	—	—		8-8

図版No	登録No	種別	遺構・グリット	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石材	使用痕	備考	写真図版
32-1	137	剝片	X15 Y10	L3b	34×32×8.5	63	流紋岩		折れ面有り	8-19
32-2	142	礫石器	X15 Y10	L3b	90×80×27.4	186.2	頁岩	磨：上側面	大形打石器	8-20
32-3	150	礫石器	X16.14 Y10.28	L3b	92×79×33	193.1	石英安山岩質凝灰岩	凹：両面、磨：片面		8-21

第32図　Ⅲ層出土遺物（3）

V．出土遺物とその年代

遺物は遺構内やIII層などの遺物包含層などからのもののほか、表土層からの出土がある。数量的にはI層出土のものが最も多く、確実に遺構に伴いその年代を決定できるものは少ない。今回図示したものは123点で、これらの中には完形に近いものもあるが、大部分は残存状況が極めて悪いものである。また図示できるものは極力掲載してあるが、未掲載のものの中には小破片なために種別さえも不明なものも多数あり、以下に示す遺物がその種別の全てを表しているものではない。以上のことから、ここでは特に遺構、基本層を問わず、年代のある程度判明した遺物を時代ごとに見ていきたい。

(1) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物としては縄文土器（深鉢、浅鉢、壷）と石器（剥片石器、礫石器、石核）がある。これらの出土地は大半がI層とIIIb層であるが、SD2堆積土中からの出土も数点ある。

縄文土器

図示できたものは深鉢23点、浅鉢1点、壷1点がある。

[深鉢]

大部分が小破片のため、土器全体としての特徴を示すものではないが、確認できる限りでの器形、口縁部の形状や特徴、外面文様についてみると数種に分けられる。口縁部から体部の形状は、底部より内弯しながら立ち上がり、最大径部よりは内で口縁部となるもの(26. 123. 168. 171)、底部より内弯しながら立ち上がり、頸部でくびれながら外反あるいは直立気味になるもの(155. 156. 165. 174. 177)がある。口縁部は基本的に平縁で、特に何の特徴をもたないもの(123. 155. 156. 165. 168. 174)、口唇部に斜方向の刻みを入れるもの(177)、突起をもつもの(171)、2個一対の突起をもつもの(177)、小波状の口縁となるものがある。外面文様は地文のほか沈線文、隆線文がみられる。沈線文は口縁部から頸部にかけて横位の沈線文が多く(26. 30. 156. 165. 168. 170. 171. 177)、162のように斜方向のものも1点みられた。177は変形工字文である。沈線の数については破片のため、不明確なところが多い。また隆線文は155の1点のみである。地文のみられたものでは、単節LR(26. 31. 77. 128. 162. 165. 168. 169. 174. 177)が最も多く、他に単節RL(167)、無節L(72. 76. 135. 166)、無節R(30. 170)、撚糸R(139. 147)、櫛目文(133)となっている。

[浅鉢]

134の1点のみである。口縁部直下に1条の沈線文がみられ、単節Lで口縁部近くにミガキがみられる。口縁部には2個一対の突起が4つあったとおもわれ、口唇部には斜方向の刻みがみられる。内面は全体にミガキ、口縁直下に沈線文がみられる。

[壷]

176の1点のみである。体部上半は内弯する小型の壷で、内外面に全体にナデがみられる。

上のような特徴からIII b 層を中心として出土した縄文土器には大洞A′式の特徴がみられるものがあることから、遺構内堆積土中より出土したものも含めた縄文土器はみな最終時期である晩期、大洞A′式のものであると考えられる。

石器

縄文時代のものとみられる石器は7点ある。9．13．137は剝片石器で、13はピエス・エスキーユである。128．129．142．150は礫石器で、128は両面に線刻らしきもの、129は側面に敲打痕、142は大型の打石器で側面に磨面がみられる。150は凹石である。これらは縄文土器包含層のIII b 層以外からの出土もあるが、縄文土器同様に本来はIII b 層に包含されていたものとみられ、時期的には縄文土器と同じ晩期のものと考えられる。

(2)　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては非ロクロの土師器、須恵器、石製模造品がある。

土師器

図示できたものは坏18点、高坏9点、甕19点、壷5点、器種不明1点がある。

[坏]

出土した坏の大部分はI層からのもので、しかも口縁部のみの破片が多く、法量も不明なため、包括的な分類はできないが、口縁部形状の違いで次のように分類できる。

1類：体部は内弯して立ち上がり、体部最大径より上方で一度内側に入ったのち、口縁部が外反するものである。これらの中には体部最大径が口縁部最大径より大きいもの（12．58．88)、その逆のもの（93．95)、ほぼ同じもの（116）がある。外面調整は口縁部はヨコナデだが、体部はヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデと様々である。内面調整は口縁部にヨコナデ、体部にヘラミガキとナデがみられる。

2類：体部は内弯して立ち上がり、体部最大径より上方は内側に入り込むことなく口縁部が外反するもの（64．99．121)、もしくは直立気味になるもの（90．94）である。いずれも最大径は口縁部で、外面調整は90にヨコナデ、内面調整は94にミガキがみられるのみである。94は高坏である可能性もある。

3類：体部は内弯して立ち上がるもの（54）である。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデ、内面調整は全体にミガキがみられる。

4類：体部はゆるやかに内弯して立ち上がり、そのまま口縁部まで続くもの(86．112)である。86は内外面にナデ調整がみられ、体部上半で僅かに内側を向く。112は口縁部外面でやや凹みをもち、内外面にヨコナデとヘラナデがみられる。

[高坏]

図示できたものは脚部ばかりで、坏部はその底部が一部残存していたものが僅かにあったにすぎない。脚部の形状により次の2つに分類される。

1類：脚部がほぼ円柱状を呈し、裾部で急に開くもの（82．84）である。外面調整はヘラケズリが縦方向にみられ、84は内面にもヘラケズリがみられる。

2類：脚部が円錐状を呈し、ゆるやかに裾部につづくもの（100）である。外面調整はヘラナデがみられ、内面にしぼり目がみられる。

他のものについては復元できないため、いずれのものかは不明だが、外面にヘラケズリ、ヘラナデ調整のいずれかで、内面にしぼり目のみられるものもいくつかある。

[甕]

図示できたものは19点ある。主として口縁部の残存するものを図化したため、ここでは口縁部の形状から次のように分類した。

1類：口縁部から頸部の形状が「く」の字状を呈し、体部はゆるやかに膨らみ、最大径をもつとみられるもの（15．43．53-2．53-3など）で、大部分の破片はこれである。また体部があまり張り出さず底部に続くもの（101）もある。頸部はきつい屈曲をもつものもあれば、緩やかなものもあり、肩部の張り具合も様々である。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデ、ナデ、ヘラケズリ、ハケメがあり、内面調整は口縁部にヨコナデ、体部にナデ、ヘラナデがみられる。口縁径は144～250 mm とばらつきがある。

2類：体部が内弯して立ち上がり、口縁部で僅かにくびれるが、そのまま内弯するもの（27）である。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ、内面調整は口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデがみられる。口縁径 112 mm の小型の甕である。

3類：口縁部がわずかに外側に開きながらほぼ直線的にのびるもの（17）である。残存部での調整は外面にハケメ、内面にヘラナデがみられる。

[壷]

図示できたものは5点ある。5は頸部のみの残存で、器高における頸部の割合が大きい小型壷である。頸部はやや外に開きながら立ち上がり、口縁部はくびれながら直立する。調整は内外面ともに口縁部はヨコナデ、頸部全体にはハケメがみられる。119も小型壷とおもわれる。83．96は複合口縁をもつ壷の小破片で、83は外面の口縁部分に粘土を貼ることにより有段化し、96は器面の外側に口縁部を接続させたものである。他に単純口縁の壷がいくつかみられるが、これらはいずれも緩やかに頸部が開き、屈曲部はきつい「く」の字型をみせ、体部へとつづくものとみられる。

これらの遺物を概観してみると、全体を把握し難い甕などにくらべて坏、高坏はある程度の

形状や調整方法が確認できる。坏については口縁部に何等かの変化をもつ１、２類が多く、口縁部近くで屈曲し、内外面にミガキやナデを施す特徴は東北地方における土師器編年の南小泉式に位置するものといえる。南小泉式の細分が行われているなか、坏１、２類の形状はわりと各期を通した特徴となっているが、88については体部中位に最大径をもち、その内外面に稜をもつものである。これは南小泉式の中でも後出的で次型式にもみられる特徴をもつものである。また83や96は小破片だが複合口縁の壷とみられ、前型式である塩釜式にもみられる特徴を有している。今回の遺物は遺構に伴いまとまって出土したものではなく、破片資料であることから不明瞭な点も多く詳細な記述はできないが、おおむね現在認識されている南小泉式期のものと考えられ、他の時期の土師器はみられなかった。

須恵器

図示可能であったものは、器台あるいは台付壷とみられる脚部の小破片１点（105）のみである。脚部は「ハ」の字状に開き、外面に横方向の波状文が２段みられ、内面は指ナデがみられる。破片の左右両端はスカシの側面部分で、両スカシの間隔から１段分のスカシの数は最低６つ以上とみられるが、器部や脚部の裾は失われており、上下の文様帯の状況などは不明である。

石製模造品

有孔の円板状模造品が２点（23．106）、有孔の剣形模造品が１点（87）出土した。有孔円板は粘板岩製で２点とも不整な円形を呈し、表裏面、側面とも研磨されている。貫通孔は２か所みられる。有孔剣形は粘板岩製でやはり全面に研磨の痕跡が明瞭にみられる。貫通孔は１か所である。３点とも孔の径は1～1.5 mm 程のものである。

(3)　中世の遺物

中世の遺物として考えられるものは陶器、磁器、土師質土器がある。

陶器（無釉陶器）

SK1 出土の甕１点（３）、SD1 出土の甕１点（24）を図示した。３は口縁部を欠損した頸部のみのもので、形状は上半で直立し、急な「く」の字状を呈しながら下半へと続く。一部に自然釉がみられる。産地は常滑で、13～14c のものと考えられる。24は口縁部から肩部までのわりと大きい破片資料である。口縁部は受口状口縁を呈し、やや直立気味の頸部は下半で緩やかとなり、張りをもつ肩部へと続く。調整は外面の体部上半に明瞭なヨコナデ、内面の頸部下半に多くの指圧痕がみられる。口縁径は 226 mm 程と推定されるが、器高などについては不明である。産地は宮城県南部の白石窯系で、14c のものと考えられる。

磁器

SE1 出土の碗１点（40）、Ⅰ層出土の碗１点（78）を図示した。40は中国産の青磁碗で、高台部の一部のみの残存である。底部内面および高台部と底部内面の一部に施釉されており、年代

は宋代で14c 前半より以前のものと考えられる。78も中国産の青磁碗で、やはり高台部の一部のみの残存である。底部内面および高台部外側から体部にかけて施釉されている。見込み部分に文様があるが、何を描いたものかは判然としない。龍泉窯系のもので、13～14c のものと考えられる。

土師質土器

図示した土師質土器はロクロ成形後、内外面にナデ調整などを施し、底部に回転糸切り痕を残すもので、「かわらけ」と呼ばれるものの特徴をもつものである。これらはロクロ土師器、赤焼け土器などに比べて胎土が緻密で、形態的にもやや小振りな皿状を呈し、SK1 出土の 2 、4 、Ⅰ層出土の91がこれにあたる。2 は皿の底部の破片で体部との境に段を有し、底径は 90 mm を計る。ロクロ成形後、外面の一部にナデ調整が施されている。 4 は皿の底部から体部下端の破片で底径は 56 mm を計る。ロクロ成形後無調整であるが、底部に布や板らしきものの上に置いた時についたとおもわれる敷具圧痕がみられる。91は皿の底部のみの破片で底径は 60 mm を計る。内外面ともにロクロ成形後無調整で、底部に回転糸切り痕がみられる。 2 、 4 は前述の特徴などから14c と考えられ、91についても形状や胎土の緻密さなどから中世のものと考えられる。

(4) 近世の遺物

近世の遺物として考えられるものは陶器、磁器、木製品、土師質土器などがある。

陶器（施釉陶器）

SE1 出土の皿 1 点 (39)、Ⅰ層出土の鉢 1 点 (70) を図示した。39は高台部と底部を除き淡黄色釉が施され、底部は回転ヘラケズリ調整がみられ、高台部の径は 77 mm を計る。産地は美濃で17c 前葉のものと考えられる。70は底部は欠損しているが、体部は内弯しながら立ち上がり、丸みのある幅厚な口縁部へと続く。内外面共に海鼠釉が施されており、堤焼で19c のものと考えられる。

磁器

SK2 出土の碗 2 点を図示した（ 7 ． 8 ）。 7 は白磁の碗で高台部径が 34 mm を計る。高台部には砂粒が付着しており、年代は17c のものと考えられる。 8 は染付の碗で底部は欠損しており、口縁部径は 110 mm を計る。文様は見込み部分に器面を一周する横方向の線が 3 本、外面も口縁部に同様の線のほか体部にも線のみで表されたものがあるが、何を描いたものかは不明である。年代は17c のものと考えられる。

木製品

SE1 出土の漆器椀 (46)、板状木製品 (51)、杭 (52) を図示した。46は口縁部から体部までの一部で、底部、高台部は欠損している。口縁径は 124 mm を計る。下地として黒色漆を塗っ

た後に外面には赤色漆で施文しているが、内面にはみられず、赤色漆を全面に塗布したものとみられる。外面文様は口縁部直下と体部下端にある圏線により区画された中に、先尖りで葉脈が明瞭にわかる三葉の葉を配し、周りには左上りの細線が無数みられるが、これがススキのような葉を表現しているのか、あるいは波などを表現しているのかは判然としない。仙台城三ノ丸跡より出土した漆器の中に類似する文様がみられることから、この漆器椀は17c 前半のものと考えられる。板状木製品は柄の付け根から先端部分にかけて片側が欠損しているものとみられ、本来は柄の部分とそこから両側に広がるヘラ状を呈していたものと考えられる。長さ 202 mm、幅は柄の部分で 30 mm、ヘラ部分で推定 83 mm、厚さは最大で 8 mm を計る。柄の幅は一定しており、ヘラ部分は丸みをもちながら側面へ続き、先端で再び丸みを帯びる。側面は全周して面取りが施され、特に先端は傾斜の緩いものとなる。板目材で、樹種同定の結果、材質はモミ族の一種のモミである可能性が強い。また表裏面に刃物によるものとおもわれる細い無数の切傷痕がみられる。このことからこの木製品は本来は杓子などに使用されていたものが、まな板に転用あるいは共用されていたものと考えられる。

この他に近世の遺物と考えられるものに SE1 出土の土師質土器（38．47）、石製品（45）、Ⅰ層出土の瓦質土器（108）がある。47は底部は欠損しているが、ロクロ成形後無調整の素焼きの皿である。口縁部径は 114 mm で、口縁部の一部にススが付着している。45は粘板岩製の石製品で、形状は角が丸みを帯びた長方形で偏平なものである。側面に磨痕がみられるが何に使用したものかは不明である。

(5) その他の遺物

その他の遺物として少数ではあるが、須恵器、ロクロ土師器、赤焼け土器、土師質土器、瓦、鉄製品などがある。

須恵器は SK1 出土の坏 1 点（1）を図示した。底面の切り離し技法は不明であるが、回転ヘラケズリ調整がみられる。

ロクロ使用の土師器は P8 出土の坏 1 点（66）、Ⅰ層出土の坏 1 点（80）を図示した。両者とも底面に回転糸切り痕がみられ、80は体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。内面は黒色処理が施される。以上の特徴からこれらは平安期のものと考えられる。

赤焼け土器は SD1 出土の坏 1 点（18）、SD2 出土の坏 2 点（25．28）を図示した。3 点とも底部を主とした破片資料で、底面は回転糸切り痕が明瞭に残り、25は体部下端の一部にナデ調整がみられる。28は口縁部破片と同一個体とみられることで図面合成した結果、口縁径 128 mm、底径 52 mm、器高 43 mm と推定でき、底部から口縁部にかけて緩やかに開いていくもので、口径と底径の比が大きめのものとなった。これらの年代は10c と考えられる。

土師質土器は P41 出土の 1 点（67）、Ⅰ層出土の 4 点（79．114．120．127）を図示した。器

種は皿、鉢、小甕で、胎土、焼成とも良好なものであるが年代の特定はできなかった。

瓦はSD1出土の1点（14）、SE1出土の1点（48）を図示した。2点とも平瓦で凸面に縄目、凹面に布目がみられるが、詳細は不明である。

鉄製品はSD2出土の鉄鏃(36)、釘があるが、ここでは鉄鏃を図示した。雁又式の鉄鏃で鏃先部が両方とも欠損している。残存の鏃身部の長さ40 mm、最大幅26.5 mm、最大厚は茎部で10 mmを計る。

VI. 遺構の年代

今回の調査で検出された遺構の堆積土中には遺物の中では非ロクロの土師器が最も多く、後の流入の可能性を考えると時期判定の資料には必ずしもなり得ない。ここでは確実に遺構に伴うと考えられる遺物を出土した遺構のほかは、堆積土中の遺物を吟味し、遺構配置や重複関係を加味し、時期決定をすることにより以下の各時期に分けることができた。

古墳時代の遺構としてはSX2、4、5が考えられる。これらは土壙の可能性が考えられながらも残存状況が極めて悪いものである。SX2は土師器が多く出土し、図化できたものも多い。SX4は図化資料はないが土師器が少量出土しており、P29、125により切られている。SX5も土師器が少量出土している。3基とも小規模なものだが、形態的には異なり、配置などに規則性はみられない。本調査において出土した非ロクロの土師器が基本層中も含めてほぼ全て南小泉式に属することより、遺構の時期も古墳時代中期のものと考えられる。

中世の遺構としてはSK1、SD1、SB1、2、3とII層分布地区にみられるIII層面段差が考えられる。これらの中で年代決定の基準となったのがSD1である。堆積土中には多数の土師器がみられたが、溝の底面より白石窯系の陶器が出土したことより、SD1は中世のものと考えて間違いないものと言える。SB1、2、3はSD1を挟んだ東西にある建物跡である。規模はSB1が3×1間、SB2が5×2間、SB3が4×4間で、柱間は桁行で220 cm～308 cm、梁行で165 cm～390 cmと様々で、SB1とSB2は重複関係にあるが新旧は不明である。方向性においては一致しており、SB1と3の梁行方向が真北より西へ12°、SB1が14°とほぼ同様の数値を示し、SD1が真北より西へ11°であるのとほぼ一致している。またSB1、2の南側に桁行方向とほぼ同方向にIII層上面の段差がみられる。低位部分にはII a～c層が堆積し、低位面は全体として平坦であるが、II層下面は乱れており、あたかも耕作土の状況をうかがわせる。II層からは土師器が少量出土している。SK1はSD1やSB1、2、3と直接の関わりはもたないが、堆積土中より出土した常滑産の甕や土師質土器から中世のものと考えられる。SD1やII層上には建物跡やそれと関わりをもつとみられるピットは全く検出されていない。これは単に後に掘り込まれたものということより、前後関係は別として両者がある程度計画性をもってつくられたもので、ある時期

において同時存在していた可能性が考えられる。SD1 の堆積土は自然流入土で、大溝として永く機能していたものと推定されるが、その下限については明らかでない。建物跡についても調査区内に柱穴とみられるものが他にいくつもあることから、3 棟以外にも建物跡存在の可能性は十分にあり、遺物からみた遺構の年代は13c 後半から14c 前半を始まりとするものと考えられる。近年調査された第14、16、17、18次の各調査においても中世とみられる掘立柱建物跡や土壙跡、溝跡などが多数検出されている。第16次調査においては14～15c とみられる周囲に堀を巡らす城館跡が発見され、支配者階級の側からみた中世社会の一端を垣間見ることができるものといえよう。

近世の遺構としては SK2、SE1 が考えられる。両者は調査区西側に並んで検出された。出土遺物より SK2 は17c、SE1 は17c 前半のものとみられるが、関連性は認められない。

その他として特に時期を決められなかった遺構に SD2、SK3、4、SX1、3がある。SD2 は遺物量からすると縄文土器が多く、これは立地場所にIII b 層があったことによるものと考えられる。他に赤焼け土器が数点みられ、これ以降の遺物が無いことから、断定はできないが SD2 は平安時代の可能性がある。SK3 は SB3 を切っていることから中世以降と考えられる。SK4 は SD2 を切っていることからおそらくは平安時代以降と考えられる。SX1 は底面において SB1 の柱穴を検出したことから中世以降と考えられる。SX3 はII層下で検出したことからおそらくは中世以前と考えられる。

遺構ではないが、今回III層とされ縄文時代の遺物を出土した層は従来南小泉遺跡の遺構検出面となっている層である。本調査区内ではこれがIII a、b′、b、c に分層され、III a、b′、b 層は西側一部のみの確認であったが、後世の天地返しの状況をみると、より広範囲に存在していたものと考えられる。III c 層は全域にみられ、遺構の検出はほとんどがこの上面であった。遺物を包含しているのはIII b 層で、III a、 III c 層にも縄文土器が僅かにみられたが、III b 層との時期的な違いはみられなかった。深掘り調査の結果、III層より下層はすべて砂質土で、遺構検出面より約 2.5 m でグライ化が始まる。各層上面は傾斜しており、明らかに水の作用による自然堆積の状況をみせ、生活面の形成はなされなかったものと考えられる。これに対してIII層はシルト質土で、下層に比べるとかなり安定している層となっている。残念ながら今回は縄文時代の遺構は検出されなかった。南小泉遺跡におけるこれまでの調査では中期から晩期の縄文土器出土のほか、弥生時代においては各時期の土器のみならず遺構の検出もなされているが縄文時代の遺物を包含する層や遺構の存在はまだ確認されていない。III b 層の形成理由や堆積範囲は明らかでないが、層中の遺物は単なる流れ込みということのみならず、付近に遺構を伴った生活の場が存在していた可能性を示すものとなっている。

Ⅶ. まとめ

1．南小泉遺跡第19次調査は宅地造成に伴う事前調査として実施され、調査地は遺跡の北半部の西端にあたり、広瀬川により形成された自然堤防上に位置している。

2．検出された遺構は土壙跡４基、井戸跡１基、溝跡２条、性格不明遺構５基、掘立柱建物跡３棟の他、多数のピットがある。これらの遺構は出土遺物などにより時代の判明したものがある。

・古墳時代　２．４．５号性格不明遺構

・中世　　１号土壙跡、１号溝跡、１．２．３号掘立柱建物跡ほかピット多数

・近世　　２号土壙跡、１号井戸跡

3．遺構検出面であった基本層Ⅲ層より縄文時代晩期の土器や石器類が出土した。本遺跡で縄文土器が包含層から出土したのは今回が初めてで、付近に遺構の存在も予想される。

参考文献

氏家和典　1957　「東北土師器の分類とその編年」『歴史』第14輯

白鳥・加藤　1974　「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県教育委員会

阿部・千葉　1980　「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県教育委員会

丹羽・阿部・小野寺　1981　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県教育委員会

丹羽　茂　1983　「宮前遺跡」『杓木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県教育委員会

東北歴史資料館　1983　『東北の中世陶器』

結城・佐藤　1985　「仙台城三ノ丸跡」仙台市教育委員会

工藤哲司　1986　「松木遺跡」『柳生』仙台市教育委員会

佐藤　洋　1987　「南小泉遺跡－第14次発掘調査」仙台市教育委員会

兼田芳弘　1987　「南小泉遺跡－第二次調査」『宮城県仙台市南小泉遺跡』南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所

渡部弘美　1989　「南小泉遺跡－第15次発掘調査」仙台市教育委員会

写　真　図　版

調査区全景（西から）

南壁断面状況
（ＳＸ３付近）

Ⅱ層堆積状況

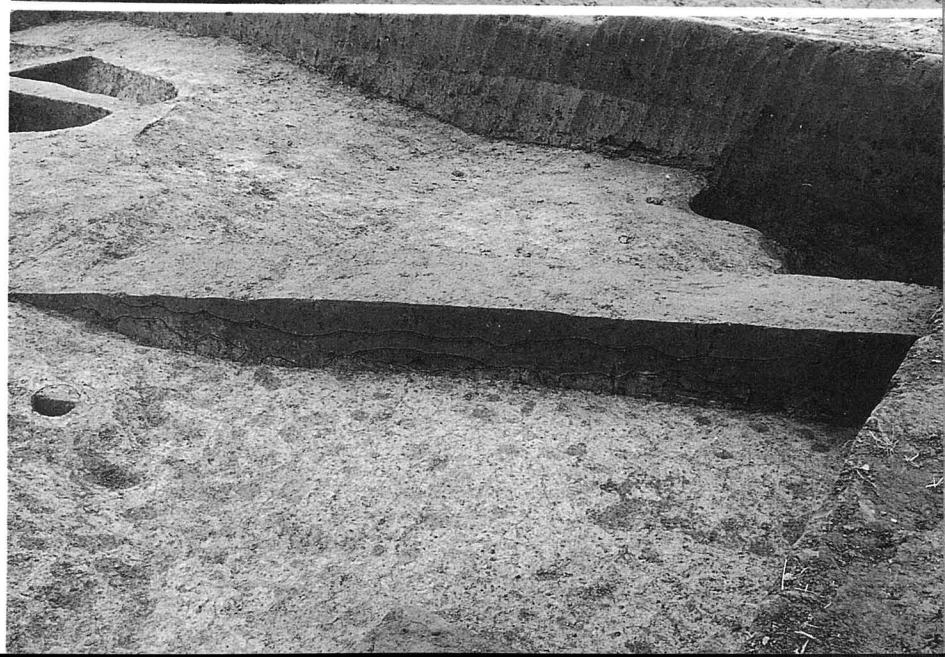
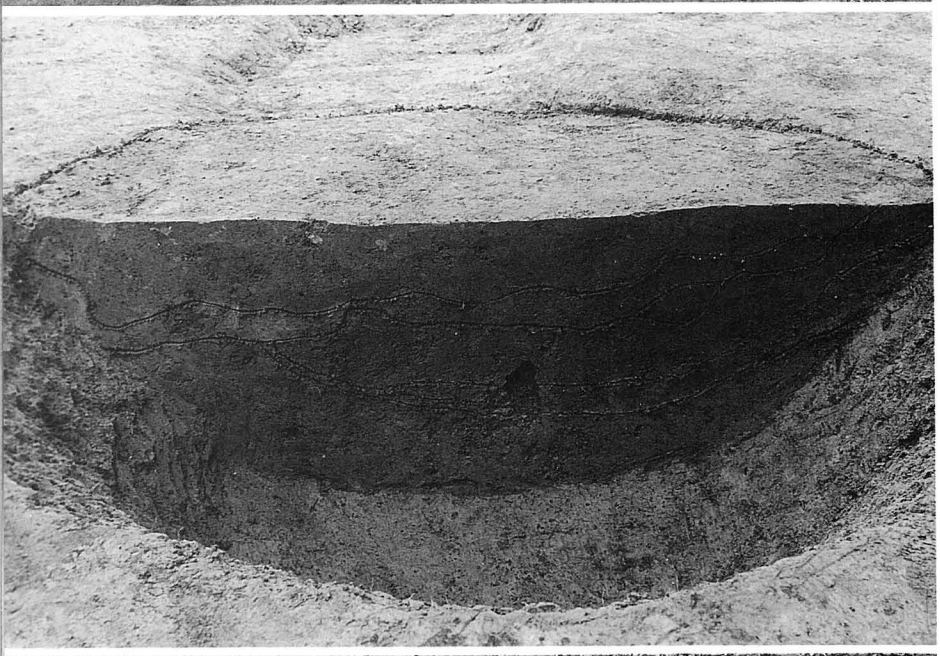
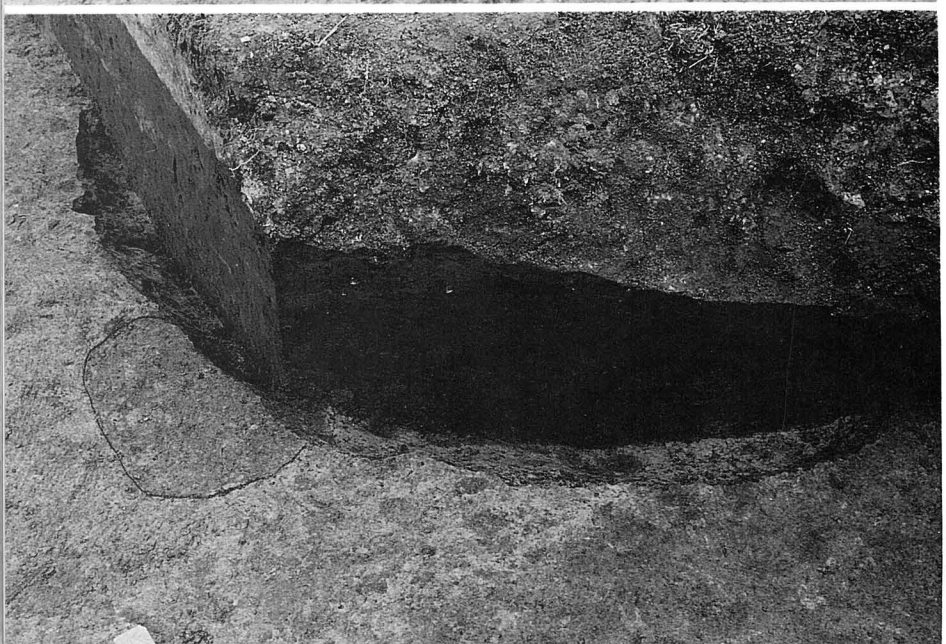


写真１

ＳＫ１完掘状況



ＳＫ２断面状況

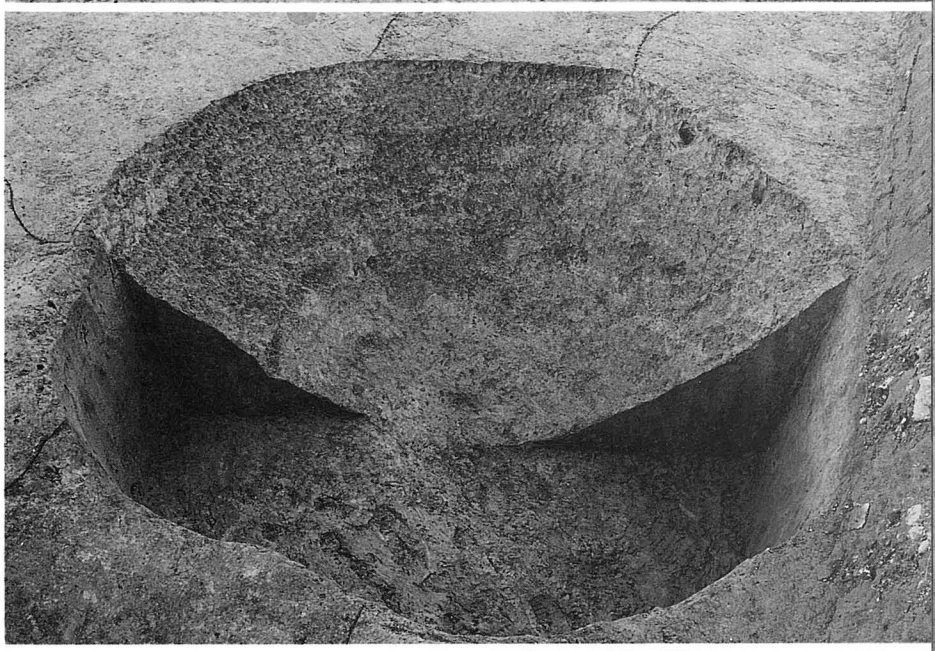


ＳＫ３掘込み状況

写真２

ＳＸ４断面状況

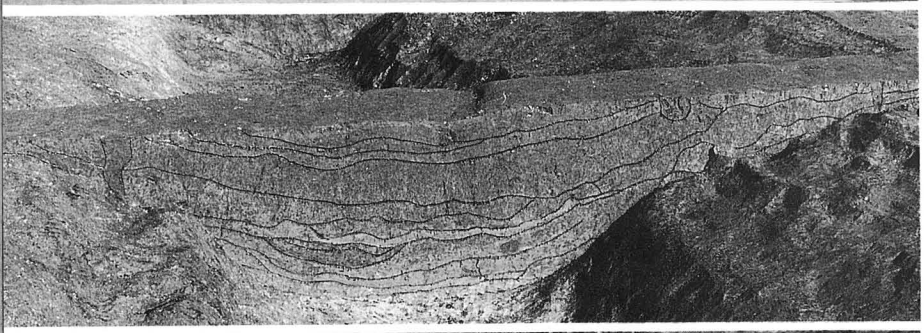
ＳＫ４完掘状況



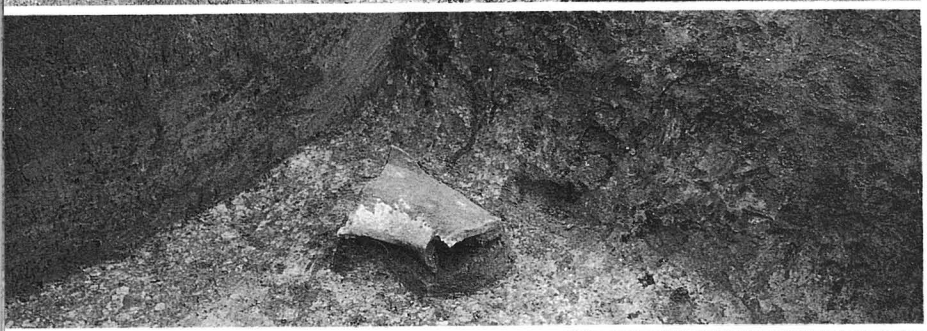
Ｐ133完掘状況
（ＳＢ３）

写真３

ＳＥ１掘込み状況



ＳＤ１断面状況

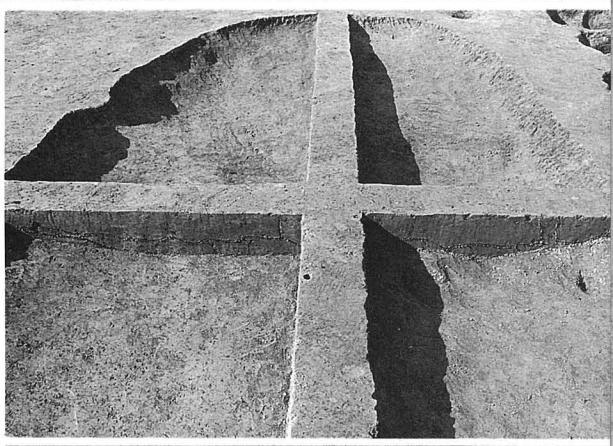


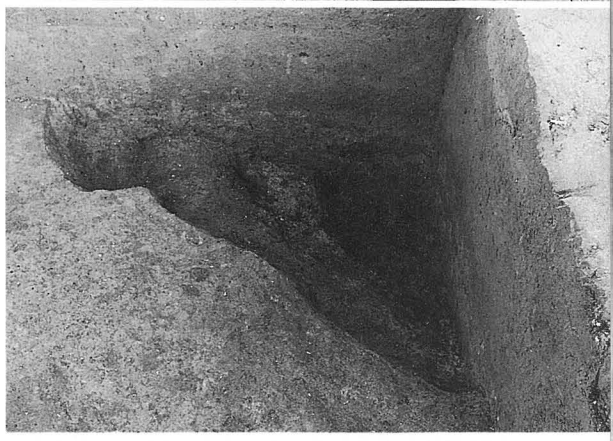
ＳＤ１遺物出土状況

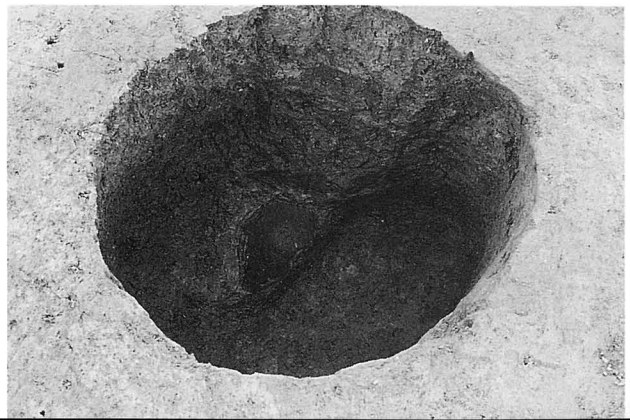
ＳＤ１掘込み状況

写真４

ＳＤ２掘込み状況

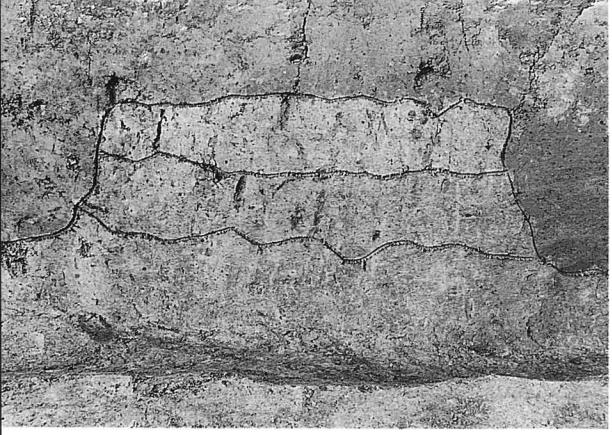






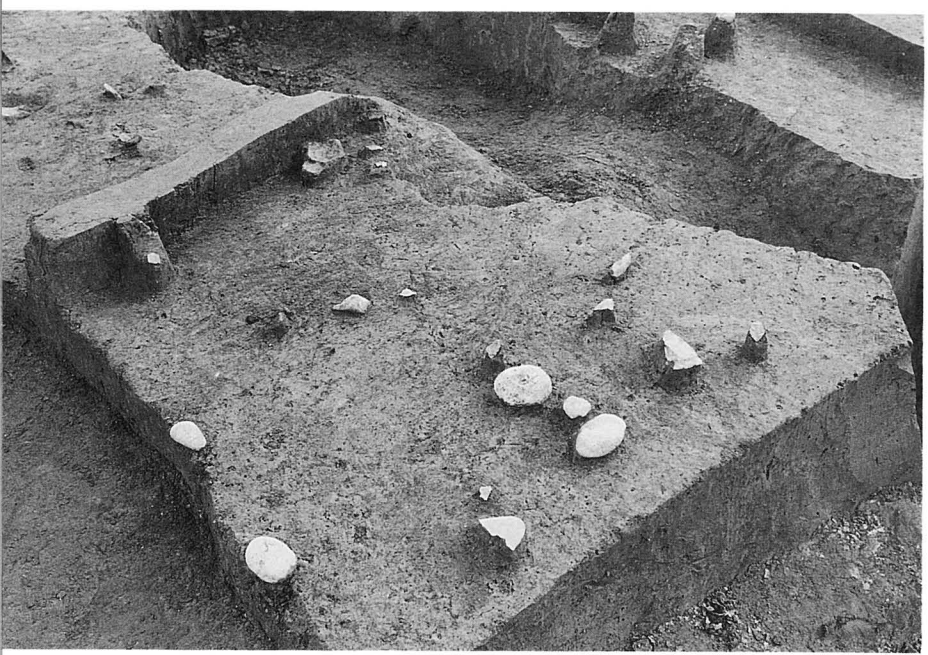
ＳＤ２断面状況・ＳＸ１断面状況
ＳＸ２完掘状況・ＳＸ３掘込み状況
Ｐ73遺物出土状況

写真５



Ⅲ層堆積状況（西壁）

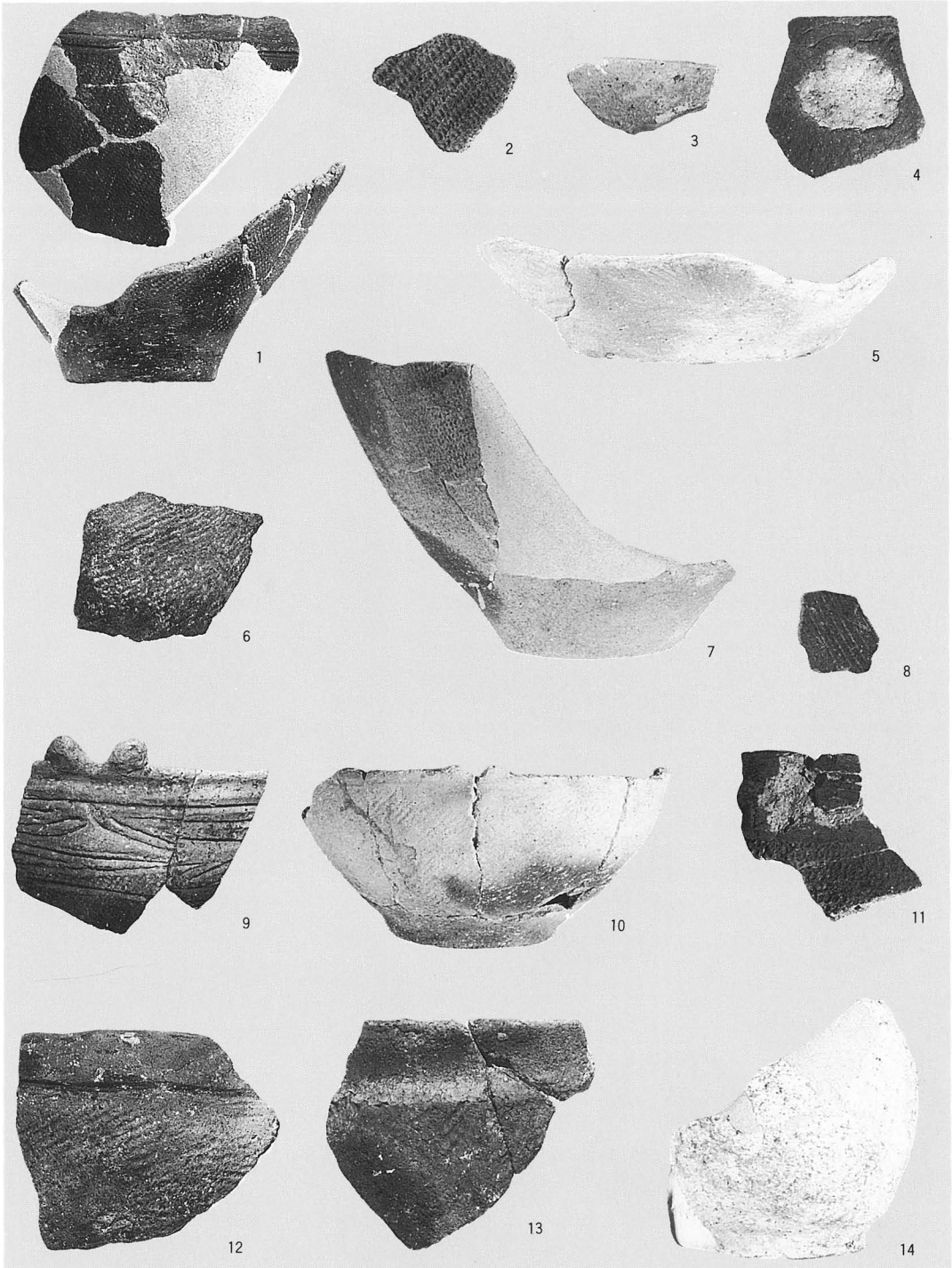
Ⅲ層中遺物出土状況



Ⅲ層中遺物出土状況

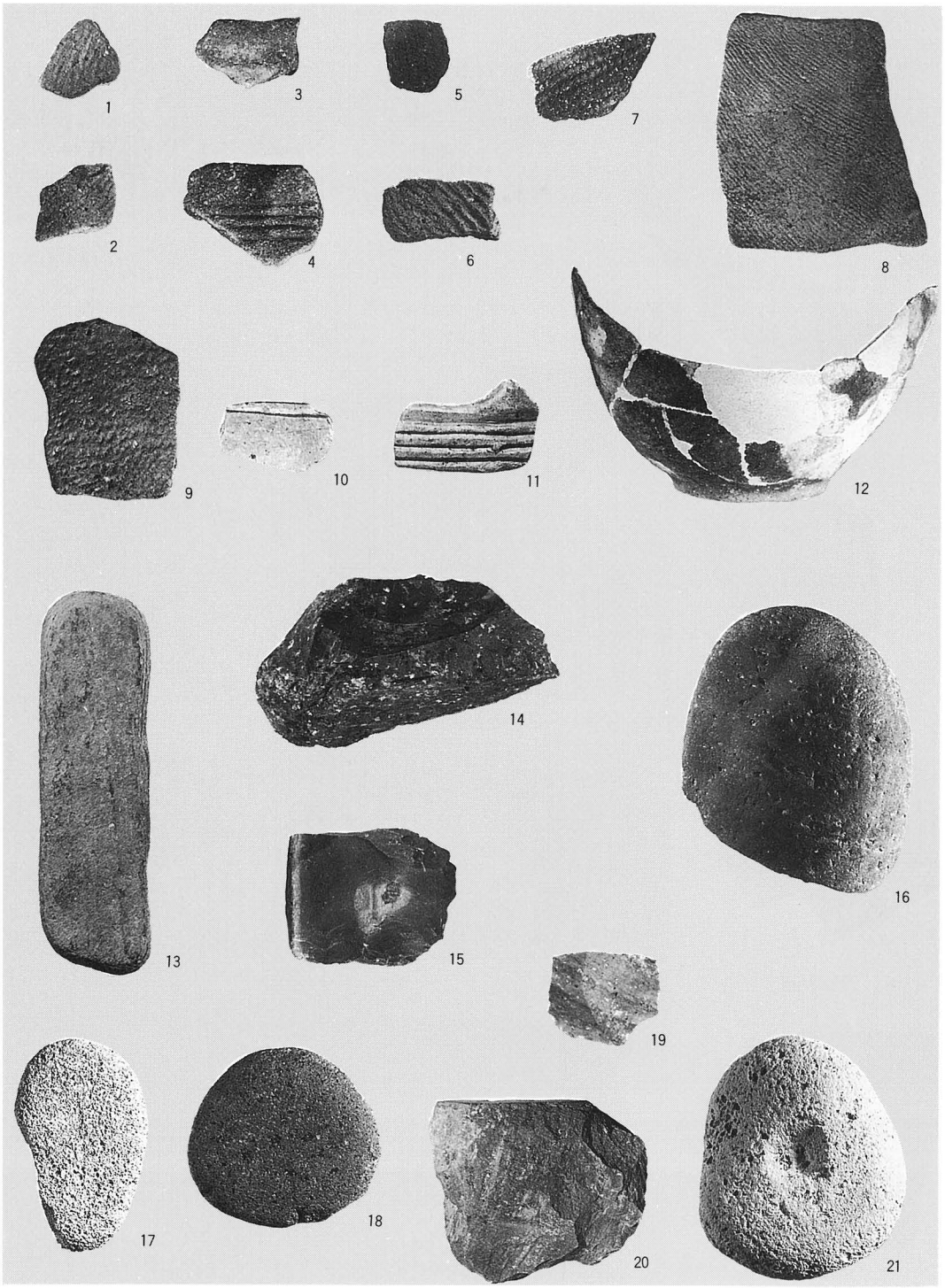
深掘り区断面状況（東壁）

写真 6



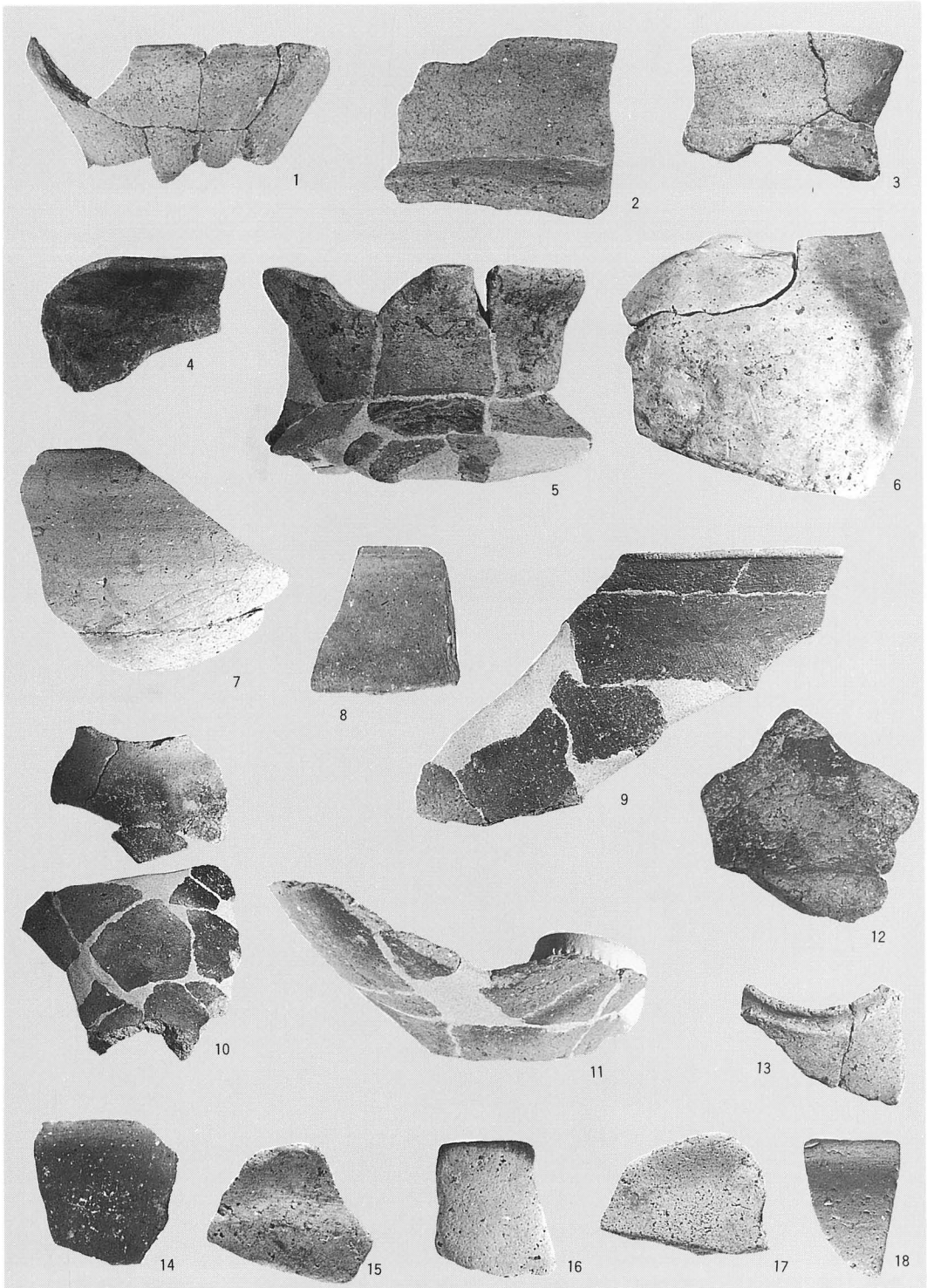
1．No.26　ＳＤ２（図17－３）　2．No.31　ＳＤ２（図17－２）　3．No.30　ＳＤ２（図17－１）　4．No.123　Ⅰ層（図27－11）
5．No.76　Ⅰ層（図26－１）　6．No.72　Ⅰ層（図27－10）　7．No.77　Ⅰ層（図26－８）　8．No.133　Ⅲａ層（図30－１）
9．No.177　Ⅲｂ層（図31－３）　10．No.134　Ⅲｂ層（図31－２）　11．No.165　Ⅲｂ層（図30－10）　12．No.168　Ⅲｂ層（図31－８）
13．No.174　Ⅲｂ層（図31－７）　14．No.176　Ⅲｂ層（図31－４）

写真７　縄文土器



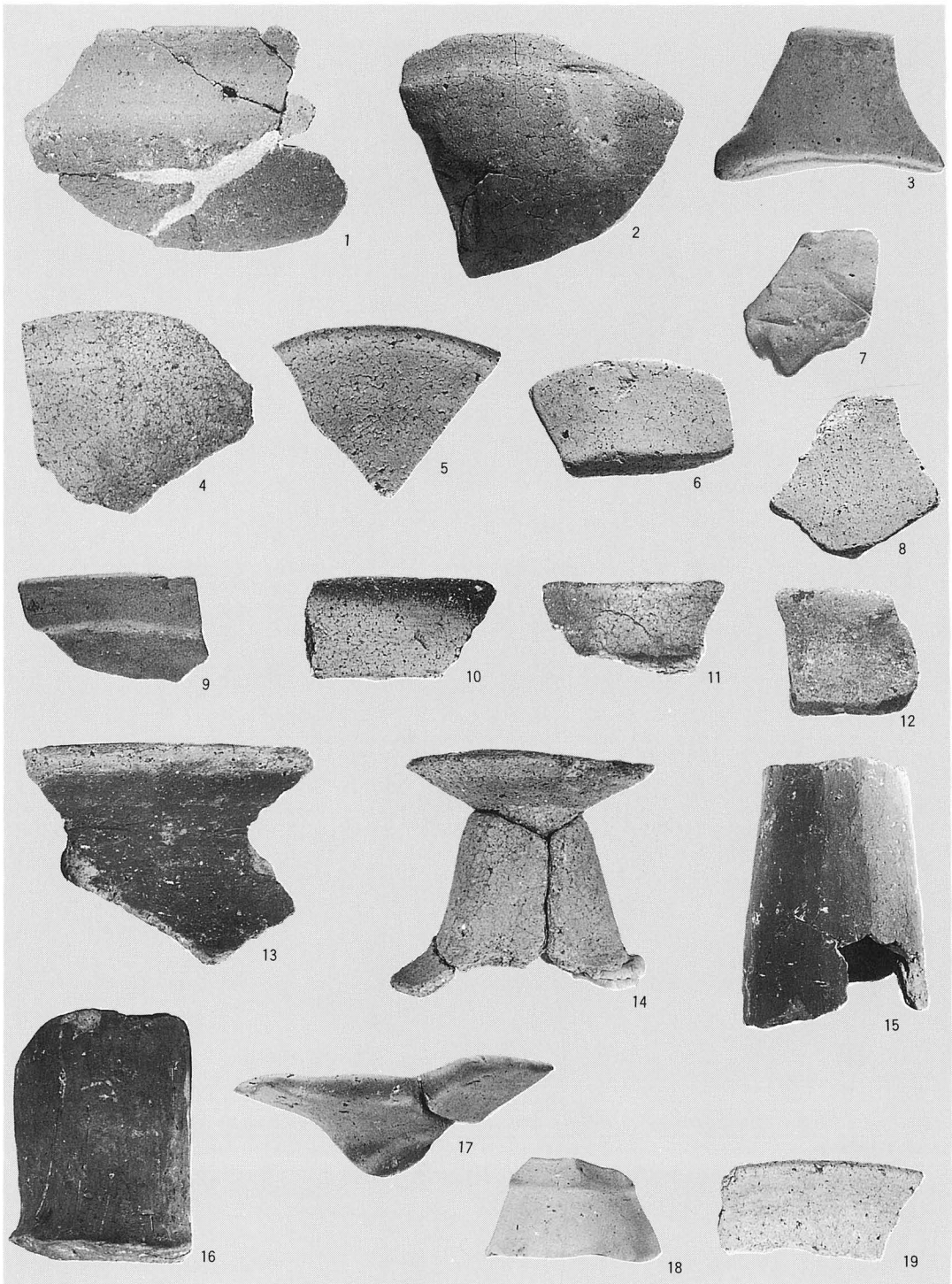
1．No.135　Ⅲb層（図30－2）　2．No.147　Ⅲb層（図30－3）　3．No.155　Ⅲb層（図30－4）　4．No.156　Ⅲb層（図30－5）
5．No.162　Ⅲb層（図30－6）　6．No.166　Ⅲb層（図30－7）　7．No.169　Ⅲb層（図30－8）　8．No.139　Ⅲb層（図31－9）
9．No.167　Ⅲb層（図31－6）　10．No.170　Ⅲb層（図30－9）　11．No.171　Ⅲb層（図31－5）　12．No.178　Ⅲc層（図31－1）
13．No.45　SE1（図14－9）　14．No.9　SK4（図12－1）　15．No.13　SD1（図16－2）　16．No.10　P133（SB3）（図25－6）
17．No.128　Ⅰ層（図27－8）　18．No.129　Ⅰ層（図27－9）　19．No.137　Ⅲb層（図32－1）　20．No.142　Ⅲb層（図32－2）
21．No.150　Ⅲb層（図32－3）

写真8　縄文土器、石器



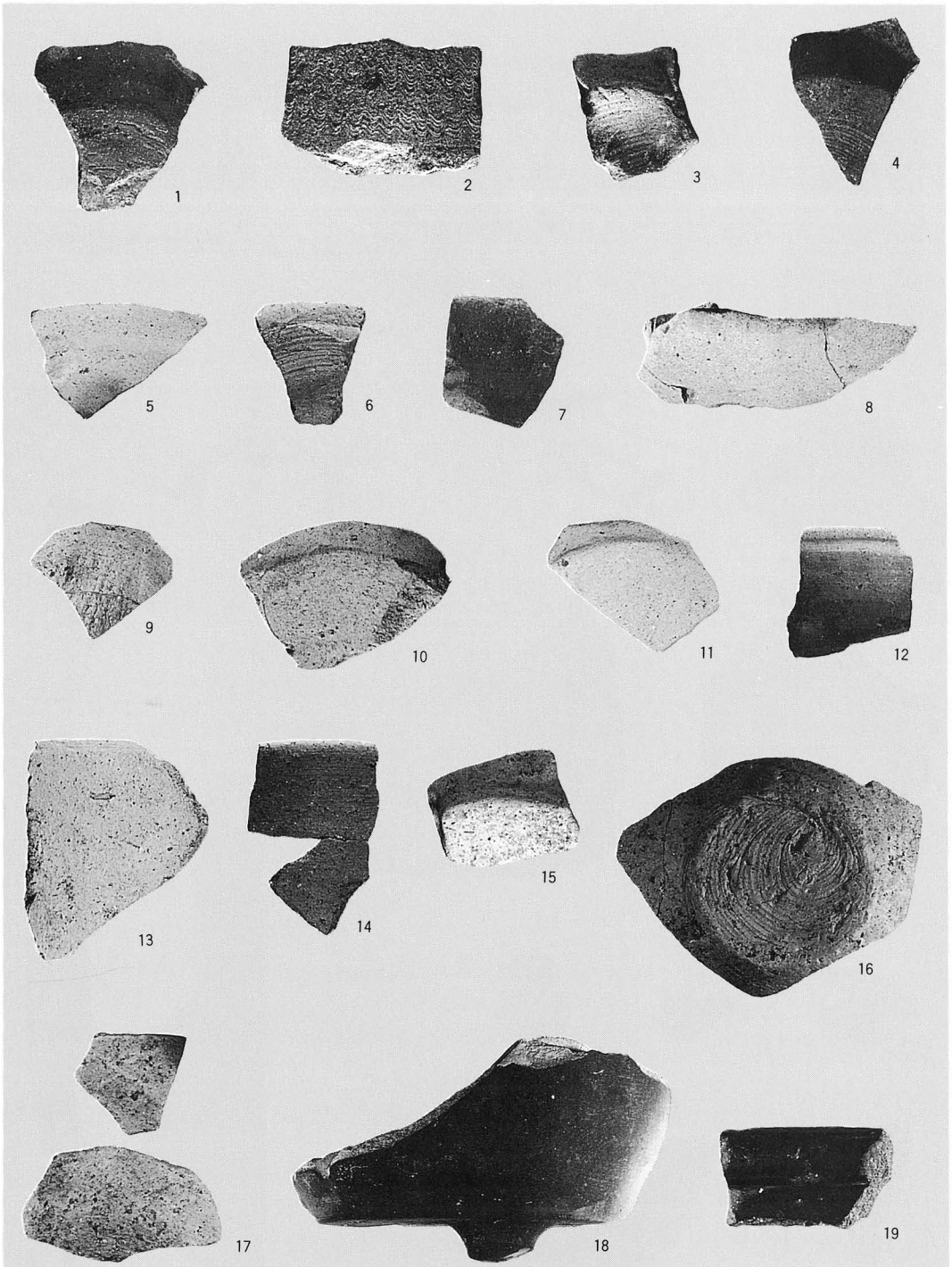
1．No.5　SK1（図8－2）　2．No.43　SE1（図13－1）　3．No.21　SD1（図19－1）　4．No.16　SD1（図19－6）
5．No.15　SD1（図19－2）　6．No.27　SD2（図17－4）　7．No.54　SX2（図19－1）　8．No.58　SX2（図19－3）
9．No.53-2　SX2（図20－2）　10．No.53-3　SX2（図19－6）　11．No.53-1　SX2（図20－1）　12．No.56　SX2（図19－4）
13．No.68　P49（SB1）（図25－1）　14．No.86　I層（図28－7）　15．No.93　I層（図27－12）　16．No.95　I層（図28－15）
17．No.99　I層（図28－6）　18．No.116　I層（図27－14）

写真9　土師器（非ロクロ）1



1．No.88　Ⅰ層（図26－４）
2．No.90　Ⅰ層（図26－２）
3．No.125　Ⅰ層（図28－８）
4．No.112　Ⅰ層（図26－３）
5．No.92　Ⅰ層（図28－１）
6．No.103　Ⅰ層（図28－２）
7．No.121　Ⅰ層（図27—13）
8．No.98　Ⅰ層（図28－４）
9．No.83　Ⅰ層（図28—10）
10．No.96　Ⅰ層（図28－３）
11．No.119　Ⅰ層（図28－５）
12．No.118　Ⅰ層（図28—13）
13．No.101　Ⅰ層（図26－９）
14．No.100　Ⅰ層（図26—12）
15．No.84　Ⅰ層（図26—11）
16．No.82　Ⅰ層（図26—10）
17．No.102　Ⅰ層（図26—13）
18．No.110　Ⅰ層（図26—16）
19．No.132　Ⅱ層（図29－１）

写真10　土師器（非ロクロ）2



1．No.1　ＳＫ１（図８－１）　2．No.105　Ⅰ層（図27－１）　3．No.66　Ｐ18（図25－２）　4．No.80　Ⅰ層（図27－２）
5．No.4　ＳＫ１（図８－４）　6．No.2　ＳＫ１（図８－３）　7．No.38　ＳＥ１（図14－１）　8．No.47　ＳＥ１（図14－４）
9．No.67　Ｐ41（ＳＢ２）（図25－４）　10．No.79　Ⅰ層（図27－４）　11．No.91　Ⅰ層（図27－３）　12．No.120　Ⅰ層（図28－14）
13．No.114　Ⅰ層（図28－16）　14．No.127　Ⅰ層（図28－９）　15．No.18　ＳＤ１（図19－５）　16．No.25　ＳＤ２（図17－６）
17．No.28　ＳＤ２（図17－５）　18．No.41　ＳＥ１（図13－２）　19．No.108　Ⅰ層（図28－11）

写真11　須恵器、土師器、土師質土器、赤焼土器、瓦質土器

1．No.3　SK1（図8－5）　2．No.39　SE1（図14－2）　3．No.24　SD1（図16－1）　4．No.70　I層（図27－5）
5．No.8　SK2（図10－1）　6．No.7　SK2（図10－2）　7．No.40　SE1（図14－3）　8．No.78　I層（図28－12）
9．No.48　SE1（図14－5）　10．No.14　SD1（図19－3）　11．No.23　SD1（図16－3）　12．No.106　I層（図27－7）
13．No.87　I層（図27－6）　14．No.36　SD2（図17－7）　15．No.46　SE1（図14－6）　16．No.51　SE1（図14－7）
17．No.52　SE1（図14－8）

写真12　陶器、磁器、瓦、石製品、鉄製品、木製品

仙台市文化財調査報告書第141集

南　小　泉　遺　跡

第19次発掘調査報告書

平　成　2　年　3　月

発行　仙　台　市　教　育　委　員　会
仙台市青葉区国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱　東　北　プ　リ　ン　ト
仙台市青葉区立町24－24 TEL　263－1166